ちの光榮の道である。其處にイエスキリストの精神と、十字架の愛が動くのである。

第三節　イエスの兩性觀の研究

譬喩言說の女性

イエスの彗敏な目は、家庭と女性の生活の隈々を迄、觀察せずには措かなかつた。そして、彼は其處から、彼の宗教と思想とを例證する格好の資料を採取するのであつた。彼は臺所で、イーストを粉に混じて、パンをねる女を見た。そして、それは彼が『神の國を何に擬へんか』とした時に直ちに――『パン種の如し』として――神の國の膨脹性の適例とされるのであつた。彼は又、首飾の銀貨の一枚を失つて狼狽して、家探しをする女の心に、零落する魂を求むる傷ましいまでに熱切な神の愛の適證を見出すのであつた。彼はまた娼妓の改心を指ざして、反つて義人よりも、先だつて神の國に入るとまで切言した。其意味は、神の外救つて呉れる者の無い、ドン底生活の人々の方が先へ天國へはひる。それは立派な人々よりも、神がよく分るからと云ふのであつた。

譬喩言說の女性

1 下女……ルカ十二ノ四五
2 姑と嫁……ルカ十二ノ五三
3 妻子を憎め……ルカ十四ノ二六
4 パンをこねる女……ルカ十三ノ二一
5 銀一枚を失ふた女……ルカ十五ノ八
6 娼妓……ルカ十五ノ三〇、マタイ廿一ノ三一
7 結婚……ルカ十七ノ二七、ヨハネ三ノ二九
8 南の女王……ルカ十一ノ三一
9 ロトの妻……ルカ十七ノ三二
10 臼ひく二人の女……マタイ廿四ノ四一、ルカ十八ノ三五

11 裁判官に訴へる女……ルカ十八ノ三
12 婦の産める最大者……ルカ七ノ二八
13 エルサレムの女よ……ルカ二三ノ二八
14 ザレパタの女……ルカ四ノ二六

兩性問題の危險性

私は進んで性の問題に對するイエスの見解を調べて見る。マタイ傳第五章二十七節以下に、イエスの姦淫觀が記されて居る。我々がイエスの宗教を充分に理解するときに、「性」の問題についての我々の見解は更新せしめられざるを得ぬ。イエスは、動機の上に於いて、色情を慎しまなければならぬとせられたのである。

『姦淫する勿れ』と云へることあるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ。凡て色情を懷きて女を見るものは既に心のうち姦淫したるなり。若し右の目、汝を躓かせば抉り出して棄てよ。五體の一つ亡びて全身ゲヘナに往かぬは益なり。若し右の手、汝を躓かせば切りて棄てよ。五體の一つ、亡びて全身ゲヘナに投げ入れられぬは益なり。(マタイ傳五章二七—三十)

『目』があつて墮落するならば、其目を抉り出せ！『手』があつて墮落するならば、其手を切り棄てよ！と、イエスは切言してゐる。進んだ今日の文明の生活に於ての最も大なる難解決は、多分兩性問題であらう。『パンの問題、財産の問題は比較的に解決し易いし、又其開鍵も多くある。然し、男女の問題はパン以上の問題であつて、それは竟に宗教問題てある』と、バートランド・ラッセルは云つてゐる。實際、凡ての問題の中、此兩性問題程、一寸した加減でドン底に落入る危險性を帶びたものは他に其例が少ないのである。かの古代エヂプトのセオゴミイ(神婚)の出現の如きが其一例である。

古代エヂプトでは財産相續を女系に依つてしたが王位の相續もまた女系に依つた。殊に黒人種のリビアン王朝以後は、アメン・ラー神の祭司長の官位が女性に與へらるゝやうになり、遂には、それが墮落して、神殿内に娼制が行はるゝに至つた。そして逆

臣が謀反して王位を簒奪しやうとした場合には――元來エヂプトの王族は、其血統がラーからの直系であると信じてゐた爲に、ラーの直系外の者が王位を覗ふ場合には――神殿内のラーの祭司の娘達(娼妓)を妻とすれば、それで法律上、女系に由る相續が實行せられて、所期する王位の簒奪が遂げられたものである。處が若しラーの祭司の娘達に嫌はれるとなると、どうしても何とか工夫を案出せねばならなかつた。そこに神婚神話の發明が行はれた。そして、自らの家系の始源を神聖化したのであつた。遂には王族は、自らの血統を餘りに尊敬した爲に賤民の血を混へることを忌み、其結果、肉親兄弟姉妹の間に、血族結婚が普通に行はれるやうになつた。そして、此事が道德的腐敗の一大原因となつたことである。明治二十年代に、福岡に起つた宗教で蓮門教と云ふのがあつて、北九州に此宗教が擴がつて、恐ろしく風紀を亂したことがある。そんな譯で、若し我々が充分警戒をしてゐないと兩性觀と云ふものは、往々にして混亂する恐れがあるものである。聖哲孔子は妾を有つてゐた。儒教では、正妻と共に副妻を認めるのである、支那では、今日でも、四人までは妻を有つ社會風習が行はれてゐる。現にかの孫逸仙ですら、妙な噂を立てられたのである。で先づ兩性觀がはつきりしてゐないと、我々の生活と云ふものは、何時とはなしに墮落する傾向を有つものである。

イエスは、此危險性を多分に帶びた。然も、人生の重大問題に對して如何なる態度を執られたかと云ふに、彼は、先づ良心の上に於て、心の底からの正しい生活が起らぬといけないとせられたのである。トルストイの名著『クロイチエル・ソナタ』の中に或辯護士が一寸した事で、其妻を殺した話が出てゐる。それは、自分の夫人がピアノを彈いてゐた處へ其男友達が尋ねて來て、ピアノを共に彈いた。すると、それを見た夫が色々の邪推をさし挿み、嫉妬の炎に燃やされて、遂に、其妻を迄殺したと云ふ筋である。實際、女の嫉妬も、男の嫉妬も、若し、常に充分、整理されてゐないならば、往々にして間違ひが起り易いものである。

人格的關係の確立

それで、我々が眞の人間生活を考へる時には、どうしても、兩性關係と云ふものか、單なる肉體的關係の域に止まるものでなくて、是非共、それは、人格的關係でなくてはならぬことに想到される。いくら美しくても女性美(外側の)は、肉體的には三十六七になると必ず凋落するものである。だから、若し人格關係を基礎にしない時には、到底、眞の家庭生活の發生と云ふものは、あり得ないものである。そして、人格が勝れて來ると、兩性關係は、必ず一夫一婦の形を採つて來るものである。イエスは一夫一婦を喧しく云はれた。之は、離婚問題及び、家族制と結婚に就いての彼の所說を見れば明らかになる。

離婚問題

(1)凡そ其妻を出して、他の者を娶らば、姦淫を行ふなり。又夫に出されたる女を娶る者も姦淫を行ふなり。(ルカ傳十六章十八)

(2)パリサイの人來りて、イエスを試み問ひけるは、「人その妻を出すはよきか」、答へて云ひけるは、「モーセは、汝らに何と命ぜしや」、彼云ひけるは「モーセは、離緣狀を書き與へて之を出すことを許せり」イエス答へて彼等に云ひけるは「モーセ、汝等の心のつれなきに因りて、此掟をなしたる也、されど開闢の始め、神、人を男女に造り給へり。是故に人は、その父母を離れて、その妻に合ひて、二人のもの一體と成るべし。然らば、二つには非ず一體なり。是故に、神の添はせ給へる者は、人之を離すべからず。家に在りて弟子達また此事を問ひければ、イエス彼等に云ひけるは、「凡そ其妻を出して他の女を娶る者は、其妻に對して姦淫を行ふなり。また女もし其夫を出して他に嫁がば、其女も姦淫を行ふなり。(マコ傳十章二——十二其他(マタイ傳五章二七)、(十九章四參照)

イエスは、どうして極端と思はれる迄に、離婚に對して、かく嚴しい態度を示されたのであらうか?、それは彼が、兩性關係の重要さを尤も深く透見されてゐたからである。勿論イエスの重視せられた兩性關係は、今日、世間にまゝ行はれてゐるやうな變質的な家庭生活で無くつて、純粹な意味の人格的關係に立つ一夫一婦主義である。

世界に於ける離婚率の一等國は、我日本である。何故日本ではさう離婚が容易く行はれるか? それは、生存競爭が激しいのと、男だけが、社會を切廻してゐるからである。

日本に於ては、まだ〳〵女の人の位置は頗る低いものであると云はねばならぬ。元來日本の民法と云ふものは、伊藤博文の拵らへたものだけあつて、それは、女の人を極めて優遇しない所のものである。男にとつて都合の惡い所は、凡て女に不利なやうに組立てゝある。英國ではアスター夫人の如きが議會に選出されてゐるのに、日本では、女は未だ議會で意志表示をする自由をさへ持たないのである。だからして、男の身勝手と御都合次第で、離婚が行はれて、世界一の成績を示すことも、決して無理では無い。若し、女の人の人格性を顧みないで成立した夫婦であるならば、それが、如何程手輕に離婚されたつて當然の事であらう。結婚問題の究極は人格の問題であらねばならぬ。世間によくある財産目當ての結婚の如きは、それは人格と人格との結合で無くつて、物と物、金と金との結合でしか無い。だから、それは決して眞正の結婚ではない。そんな事情の許に成立つた兩性關係であるならば、それが『金の切れ目が縁の切れ目』で終るとしても、それは當然過ざる程、當然のことであると云はねばな

らぬ。

然し、人格と人格とか結合されたものである時にどうして、離婚が考へられやう。イエスは唯一つの場合——姦淫——を除いては、離婚を絶對に否とせられた。

我汝等に告げん、苦し姦淫の故ならで、其妻を出し、他の女を娶る者は、姦淫を行ふなり。又出されたる女を娶る者も姦淫を行ふなり。(マタイ傳十九章九)

何故イエスはかくの如き言葉を吐かれたかと云ふに、それには理由があつた。恰度其頃、王ヘロデアンテパスが、自分の妻であるモアブ王アレタスの娘を離婚して、國に追ひ歸して、其後に、兄弟ピリピ(イツリヤの領主)の妻ヘロデヤを奪つて、妻とした。それで、モアブ王は、兵五萬を引卒してユダヤへ攻め込んで來ると云ふ噂が傳はつた。人々は寄ると觸ると、此話を持出した。そして、それは、一つの國際問題として、其頃、國中至るところで論議せられたものである。それで、イエスは此當面の問題に對して、明確な態度を示されたのであつた。

我々が若し多妻主義を是認し、人格の確立を無視するのであれば、假令句佛上人が四萬圓で藝者を落籍しやうと、たとへ本願寺の坊主が妾を蓄へやうとそれは昔からの慣例として、何等の煩悶も無く、平然として居られるのであらうかも知れぬ。日本佛敎は一方に極端な獨身主義を稱うる癖に、他方に於ては、此樣な多妻主義的傾向が現はれてゐる。それは、兩性觀に於て、どこか亂れてゐる所がある爲に外ならぬと思ふ。日本の離婚率は、それでも漸次減退の赴があることは、喜ばしいことであると云はねばならぬ。既ち、明治十七年頃には、百組の結婚に對して四十一組のお里歸り——離婚があつたものが、唯今では百に對して十一人位の割合(一割一分)になつて來てゐる。日本の離婚率の此四分の一迄の減退は、確に基督敎文明の影響が與つて力あるものであらうと思ふ。今日では敎育の向上に依つて、敎養ある婦人の間では、誰も一夫一婦迄は進んで來てゐるのである。

再婚問題の解決

イエスは、又家族制と結婚の問題についても忌憚無き考を述べて居られる。ユダヤ人は、日本の風習とよく似て家族の血統を非常に重んじた。それで血統を繼承するためには、何を犧牲にしても構はないとした。それで、極端な例ではあるが、今若し、七人兄弟の長男に嫁した女の人があつたとする。不幸にして、長男か子なくして死んだ場合には、當然、其女の人は、次男の妻となつて子を產まなくてはならないのであつた。所が若し、其次男も子なくして死ねば、此女の人は、三男の妻とせられ、三男、四男、五男、六男、皆、同じく子なくして死んだとすると、此女の人は七男の妻とせられる譯であつた。所が、七男も子を殘さずして死に最後に其女も死んだとする、其場合には、復活の時、此女は誰の妻となるか——と云ふのが、復活を信じなかつたサドカイ人の或人々のイエスに持出した奇問であつた。

七人の男に一人の女、復活後の其女の處置如何——之をイエスに持出した人々は必ずや此問題を以てイエスを遣り込めることが出來ると考へたに相違ない、イエスは、此當時の重視された社會風習、家族制に密接しか斯かる問題にどんな態度を執られたか？

家族制と結婚

甦ることなしと云ふサドカイの人來りて、イエスに問ひけるは『師よ、モーセ我等に書き遺せるは、人若し、人の兄弟、妻あり、子なくして死なば、兄弟其妻を娶りて子を生みて其嗣を繼すべしと。されば七人兄弟あらんに、兄妻を娶り子なくして死に、第二の者、此女を娶り子なくして死に、第三も之を娶り、七人同じく之を娶り、子なくして死に、終に女も死にたり。さらば七人ともに此女を妻とせし故に甦りたる時は、誰の妻となるべきか？』

イエス答へて云ひけるは『此世の子は、娶り嫁ぐことあり、かの世に入り、死より甦るに足るものは、娶り嫁ぐことなし、之また死ぬることを能はざるが故なり。蓋、天の使と等しく甦りの子にして神の子なればなり。（ルカ傳二十章二七—三六、マコ傳十二章一八、マタイ傳二十二章二四）

イエスの答は明晰であつた——『神は生きてゐる。甦りの時には男女の區別はない。甦りの時には、性の問題を離れての「たましひ」と「たましひ」との接觸である』と。元來、性別と云ふものは、下等動物には無いものであるが、高級な生物になる程、其差異が分明になつて來る。人間に於ては、尤も其差異が際立つのである。が、然し人間として見る時には、男女の區別は無くなる。

兩性問題に於て、是非共考へねばならぬ問題の一つで、今一つの重大問題は再婚の問題である。それは上述の如き甦りの問題と關連してではなく、一箇の現實問題として夫、或は妻が早逝した場合、再婚することの可否についてである。之については色々の説がある。獨身で居るのが一番いゝとする。其次にいゝ事は、一生の中、一度結婚することである。再婚は尤も不可であると、或人は説く。果して再婚は罪であらつか。イエスはさうは云はなかつた。

弟子達、イエスに云ひけるは、『苦し人、妻に於て斯くの如くば娶らざるに若かず』彼等に云ひけるは、

『此言葉は人みな受け容るること能はず。唯、授けられたる者のみ之を爲し得べし、それ母の腹より産れつきたる寺人あり、又、人にせられたる寺人あり。又天國のために自ら成れる寺人あり、之を受け容るることを得るものは受け容るべし』（マタイ傳十九章十一―十二）

然し、再婚の問題は、確に難問題――殊に日本に於ては――である。特に、先妻に娘があつて、その娘が若い後添と同年であつたりする場合には、中々折合がよく行きにくい。さう云ふ場合には、必ずしも。先妻の娘が、後に來た母を『母』と呼ぶ必要は無いと思ふ。反つて、さう云ふ不自然なことを無理に强いる爲に屢々、醜い義理の母と義理の子との爭論が起されるのである。そして相當に立派な人々であつても其家庭生活がこんなことのために悲慘に落し入れられる例が少なくない。寧ろ義理の母と子との間柄は――西洋によく其例が見られるやうに――友人關係で終始するのがいゝと私は思ふ。此邊の問題の實際的解決が、今日の日本の多くの家庭にとつての急務である。

又、一方、日本の女性問題と云ふものは、結婚問題に集注してゐる。之は餘程、警戒せぬと大きな誤りに落入り易い問題である。

戀愛の自由の本質

今日、或人々は、盛に自由戀愛を唱導する。そして中には又極端に走つて、離婚問題を拔きにした實に亂暴な性慾生活に耽る人々さへある、日本の或有名な小説家にこんな人がある。其人は妻に三人の子供迄あるに拘はらず、自分の弟の情婦が欲しくなつて來た。それで自分の妻を友達に讓らうとした。友達も最初は斷つたが、同情を表してゐるうちに小説家の夫人に熱注するやうになつた。所が、かほど迄にして妻を棄てゝ、情婦の下に此小説家は走つたのではあつたが、然も其女は外の男を想つてゐることが知れて來た。それで、彼は、再び、妻の愛に立歸つた。すると驚いたことには、妻は妻で、新らしい男に氣が向いて行つてゐるのであつた。

こんなのが戀愛の自由の眞相であらうか。自由の戀愛とは、夫を自由に變へ、妻を

自由に變へることの自由を意味するのであらうか。さう思ふ人があるならばそれは非常な謬見である。それは、人格を基礎とした意味に於ての自由であらねばならぬ。平塚明子さんの家庭生活と云ふものは、決して亂暴なホームでは無くて、立派な生活である。母性を眞實に想ひ、人格の愛が二者の間に湧くとき、どうして、男から男へ移る如き性慾生活の頽廢が企てられやう。決して、そんな無暗なことは出來ないものである。

だからイエス・キリストが一夫一婦を云はれたのは萬代不易の眞理である。そこにのみ、自由な人格の愛に依る人間の本當の結合がある。そして、「たましひ」と「たましひ」とが相憧れて結ばれる時に、最早それは「二つではなく一體である。」此處まで來て、始めて家庭問題及び性の問題の尤も本質的な純潔な解決があるのではないか。

第四節　イエスと女性の接近

ベタニヤの女マリア

イエスには、女の友人が多かつた。其中でも、ベタニヤ村のマリアはイエスと極めて親密な間柄にあつた。

『イエス、エルサレムに至り聖殿に入り、悉く見廻し、時すでに暮に及びければ十二弟子と共にベタニヤに出で往けり』（マコ傳十一章十一）とは、イエスが十字架に釘けらるゝ數日前の記事であつて、イエスが十二弟子と共に此村に宿つたことを示すものである。

ベタニヤの女マリヤの研究

△無名の女にして無名地にてシモンの家にて油をぬりし女は明にベタニアであつた。（ルカ七ノ三七、ヨハネ十二ノ一）

△ヨハネ十二ノ一を見ると之が一層明白になる。

△このマリアはラザロの姉（？）

△このマリアは二度油をぬつた。（マコ十二ノ三、マタイ廿六ノ六）

△**イエス**は能く此家を訪問した

(1)ルカ十ノ三八　(2)マコ十一ノ一　マタイ廿一ノ一七　(3)マコ十一ノ一一　(4)マコ十一ノ一二

中世紀に於ては、婦人が侮蔑せられてゐて宗教上に於ても女は救に與れぬものゝやうに考へられた。然し、イエス自身の宗教に於ては、さう云ふ氣振は少しもないのであつて、最初から女性は尤も美き位置に置かれてゐる。それにも拘はらず、中世紀に於ては、女性の位置が非常に低下せしめられて、そこに中世紀の墮落の因が釀されるのであつた。天主教會内部に於ても、一方に嚴格に獨身主義が標榜せらるゝ反面に、蓄妾の弊風が行はれて、忌はしい墮落が始まつてゐたのであつた。ルウテルは、之を見て天主教會の行き方は、明らかに、『人間性に反してゐる』ものであるとして、彼自身四十二歳で以て結婚をしたのであつた。これは、其時代の宗教界にとつては、一つの革命的影響を與へた出來事であつた。カルヴインも矢張り、時流に顧慮せずして、オランダから遁れて來て數人の連子のある寡婦と三十一歳の時結婚をしてゐる。或人たちは、獨身生活を何か特別に清いもの、如く云ふが、それは偏見である。それは、中世紀の女性輕蔑の思想に囚はれた考へである。十九世紀から二十世紀の宗教は――そしてそれがイエスの教へた所だ――家庭問題、兩性問題、女性問題の凡てに亘つて、其純化を圖るところのものであらねばならぬ。高められし「たましい」と「たましい」との接觸てある時に、一度結ばれし結婚生活は、決して破壞さるゝものではなく、人格と人格との全體的結合である時、それは決して、一時的な浮ついたものではあり得ないのである。即ち、これは女性の位置が餘程、高められて來なければ行はれ難いことであるが、イエスの如きが女に接するに聖く接し、女性の個性を尊重せられたことが、時代を通じて女性尊重の機運を促進する著しい動因となるのである。

イエスと女性の接近

イエスと女性との接近については、(1)イエスの運動には女が多く居た。(2)イエスは女に接するに聖く接した。(3)其友人に女が多くあつた。(4)イエス自身は獨身であつた。(5)イエスは復活後、第一に女に現はれた。(6)イエスは女の友人を愛した。(7)女達はイエスに凡てを捧げた。(8)イエスは母を愛した――ことを擧げることが出來る。イエスの運動に女性の力が多く加へられてゐ

たことは、前述の如くガリラヤの女達の傳道團が結ばれてゐたことを以ても明らかである。

更に又、基督教の傳播が婦人に俟つことの大であることは、ユーセビアス（四世紀頃の教會史家）の歴史を見ても知ることが出來る。

イエスの女性觀としては、次の七つを擧げることが出來る。(1)女性を侮辱しなかつた。（他の宗教のやうに）(2)女性を尊敬した。（處女崇拜參照）(3)女性は墮落しても神に近いとした。（ルカ傳七章三六、ヨハネ傳八章七、マタイ傳二十一章三一）(4)兩性觀が正當であつた。（姦淫觀 一夫一婦觀、兩婚觀）(5)家庭生活と兩性觀を區分された。(6)家庭よりも女性の個性を尊重した。（母性として、神の子として、二人の中の一人が大事とした。）(7)血族社會よりも精神社會を尊重した。佛教が女性を侮辱したことは、既述せし所であるが、親鸞が來て女人濟度を説く迄は、日本の宗教の凡ては全部婦人を侮辱して來たものである。イエスは始めから――『侮辱しない』だけでなく――女性に對して明らかに尊敬を表はされてゐた。處女マリアの崇拜と云ふものも、イエスが女性を尊敬せられた爲に生起したものではなからうかと思はれる。彼はまた娼妓が反つて義人よりも速かに神の救に接することを語り、兩性觀についても、極めて穩健な考を抱いて居られた。トルストイなどはたとへ全民族が絶えやうと、禁慾生活は美はしいとするが、イエスは、結婚生活を祝福した。滿洲では、極端な一夫一婦制が行はれてゐて、ある時には、まだ生れぬ先から、夫婦約束がなされて、滑稽な程早婚が行はれる。かゝる處にては、女性の個性の尊敬と云ふものは全くなくて凡ては極端な家族制度の犧牲にせられるのである。イエスは、一夫一婦主義を高調したが、そんな亂暴なことは云はれなかつた。彼は人格を基礎として、此等の問題に對していつもライト・ジャッヂメント（正當な批判）を下されるのであつた。イエスは、又『人は其父母を離れて其妻に合ひて、二人のもの一體と成るべし』（マコ傳十章七、八）と云つて、家族と家庭との區別をはつきりとされた。之は家族と家庭とは全然別箇のものである――との意味である。

日本の家庭にどうして波瀾が多いかと云ふに、それはホームがファミリーの犠牲になつゐるからである。我々はどうしても此二者を截然と區別しなくてはならぬ。ホームは愛の生みしものであるが、ファミリーは血族的のものである。愛なき所には、家庭は、決して存在せぬ。イエスは、此二者を、家庭生活と兩性觀、血統と愛とをはつきりと區別せられた。從つて女性の個性そのものを尊敬せられた。そして『父母よりも我を尊ばないものは、神の前に價打の無いものである』（マタイ傳十章三七）として、血族に由つてつながる社會よりも、精神に依つてつながる社會の方を、（これが眞正の社會である）尊重せられたのであつた。即ち、血統よりも愛を重んじ、父母よりも、神を重視せられたのであつた。イエスの女友達、或は女弟子として、（其男の十二弟子の數に合せて）左の十二人の女性を擧げることが出來る。

(1) マグダラのマリア
(2) ベタニヤのマリア
(3) ベタニヤのマルタ
(4) ヨハンナ
(5) スザンナ
(6) クレオパの妻
(7) サロメ　イエスの母姉妹ゼベダイの妻か？
(8) ペテロの妻
(9) ナインの寡婦
(10) 十二年血漏の女
(11) ヤイロの妻
(12) 十八年鬼に惱まされし女

叙上の如くイエスは單に口のみで女性尊敬を說いたのではなく、彼は眞實な女性の友であつた。そして、彼を圍繞した女達に聖い感化を與へ、自づからは女性の地位を

高められたのであつた。

女性の高譽とイエスの宗教

宗教のすぐれた國民でないと、到底女性の尊敬は行はれない。中世紀の歐洲では、女をレデーとして、騎士達は、女から尊敬せらるゝことを無上の名譽と考へたものであるが、かゝる方面に向つての、基督教の感化と貢献とは甚大であつた。ある人は、男には平均一千三百七十六グラムの腦味噌があるが、女には平均一千二百三十七グラムしかない。即ち、女は男に比して平均百三十九グラムだけ腦の重量が少ない。だから女は男より低劣であると。そして女性を輕視するのである。然し、若しも身長と體重と腦の比例を取るならば、女の方が却つて男に勝るのである。又腦の重量と云ふものは、永遠に不變的なものではないし、女子の腦力が男子よりも劣つてゐると云ふ證據は少しもない。それは全く教育の程度に依るものであつて、充分腦力も教育の力で左右され得るものである。

それにも拘はらず種々の理由を以て女性を輕蔑する人が今日でもある。イエスの時

代にも、シヤムナイ（保守派）、ヒルレル（自由派）の學徒が盛に婦人問題を上下したことである。

然し、イエスは、其等の人々――女性侮辱の――とは全然異る態度を執られた。そして、イエスの其態度と精神とが、中世紀にズウッと持ちこたへられて近世期に及んだのである。女性の解放の叫ばれる今日に、イエス程、女性を正解した宗教家を發見することは實に困難である。イエスまでの凡ての宗教家は女性を侮辱して。そしてイエスに依つて女性の尊敬されることが教へられたのである。

ラテン民族は、小アジア地方――此地方には女神禮拜の風が古代から行はれてゐた――から女性尊敬の風を傳へられて、處女崇拜を基督教會の中に發生せしめたのであつた。今日も天主教會は處女マリアの崇拜を其信仰の中心に置いてゐるが、之はよし間違つてゐるにしても、イエスが女性を尊敬したために、それが教會に於て誇大視せられたのだと考へれば、イエスの女性尊敬の程度が知れるのである。マホメット教で

は天國へ行けば女が四人與へられると約束する。全くそれは男子中心の宗教である。我國に於ける女性への特殊待遇、社會的隔離と云ふものも、全く女性を尊敬しないところから出て來るのである。

社會問題を考察する時、我々は、婦人問題をどうしても度外視することを許されぬ。然も、此婦人問題中の主要問題は、確に女性の高擧に外ならぬ。虐げられた女性の個性もイエスの宗教が、今の時代に味ひ直されると共に、必ず今一度其高擧を見るであらう。そして、女性の地位も、獨りでに高められるに至るであらう。イエス・キリストに於いて、疑もなく確實に。

第六章　イエスと人類の更改

我なんぢらに告げん然ず爾曹悔改めずば皆おなじく亡さるべし。

——ルカ傳十三章三——

第六章　イエスと人類の更改

第一節　洗禮者ヨハネと其運動

社會的背景

一千九百年前——イエスの時代——の社會狀態は違つた意味に於て、今日の、二十世紀の社會狀態に似てゐる處がある。

其當時、ロマの社會生活は、一つの行き詰りに在つた——宗教上、政治上、道德上、凡てが、恐ろしい行き詰りの狀態に在つたのである。

政治的狀勢は、どうであつたかと云ふに——當時の政治家にして、借金せざる者無しと云ふ有樣であつた。シセロの如きも、重い負債を負ふて困り、ジユリアス・シーザーも借金に困つたのであつた。又軍人達も、大借金に苦しんでゐたのであつた。『神を求むる人』の一人に數へらるゝ、哲人セネカの如きも、非常な吝嗇であつて、油壺一

つと一冊の本とで足れりとし、死ぬ時には、何十萬圓を遺したと云ふことである。

表面的には、克己的であつたが、裏面には隱された種々の秘密がある。表面と裏面と全く懸け離れた僞善的時代であつたのである。

ユダヤにも、矢張、このロマの惡習俗が傳播してゐた。紀元前一八〇年エピファネスがユダヤを支配すると共に、ギリシャ風が流入して、古風のユダヤ主義と入れ換り、社會は、昏迷の裡に閉されたのであつた。そして、裸體體操、其他エヂプトから淫猥な風俗が移入されて、良俗は跡を斷ち、又兄弟結婚の風習すら傳えられたのであつた。

當時のエルサレムの神の宮は、ヘロデ大王の建てたもので、凡てが大理石づくめのギリシャ風建築であつたのである。昔のソロモンの宮は、アジャ的であつたが。

そして、ユダヤの思想界の傾向も全くギリシャ風の哲學思想に壓倒されたのであつた。サドカイの人々は、唯物的で、たましひの實在を信じないし、甦を否定したのであつた。またパリサイ哲學は、破壞的な貴族的なものであつた。

祭司ジョン・ヒルカナスの如き——純然たるギリシャ化した人間であつた。

ヘロデ大王に至つては、エルサレムに、エホバの神殿を築くと同一時に、アテンスでは、戀の女神のために、殿堂を築くと云ふ有樣であつた。

一般の氣風が、こんな風で、非常に寛容で、ギリシャ的で、少しも特段な信仰と云ふものがないのであつた。

一般がこんな風で——當にヘブライ主義の行詰りの時代であつたのである。さうかと思ふと固い所では、戒律的で、安息日に十八項の誡を守るべきことを強要し、全く精神の自由を認めぬのであつた。その反面には、放縱で、淫蕩で、戀神を禮拜し、裸踊に興じ、エリコの溫泉場の如き、享樂の巷と化して、淫蕩な空氣を漲らすのであつた。

イエスは、『汝等何を見んと出でしや、美服を衣たる人なるか？　美しきものを着て奢れる者は、王の宮にあり』（ルカ七章二五）と云つたが、町には、ヒツポドロームあり、

觀樂境があつた、人々はそこで、狂態の限りを盡すのであつた。

ヘロデ大王は、自分の死ぬ時、誰も悲しんで呉れぬので、エリコのヒツポドローム（競馬場）に集つてゐる人々を鏖殺した。そして、彼は、林檎のナイフで自分の咽喉を突き刺さうとした。そして『見よ！　民衆が皆俺のために泣いてゐるぢやないか』と云つた。それ程、彼は、虚榮の強い男であつた。

さう云ふ時、空に大きな星が輝いた。

それで、時勢は、何かの變改――革命か？　心的更改か？　その二つのうちどちらかがなければ、二進も三進も行かないのであつた。

然し、心的更改は、間どろこしい。と云ふので、ガリラヤからは過激な連中が――チウダヤ、非税主義のバラバや、アスロンゲス兄弟の如きが、現はれたのであつた。多くの人々は、肉的な――外側の革命を要求した。イエスの言葉として傳へられる『手を犂につけて後を觀る者は、神の國にかなはざる者なり』（ルカ九章六二）及び、『死にたる者に其死にし者を葬らせよ』（ルカ九章六十、六十一）などゝ云ふ言葉は、實は、當時の革命主義の標語であつたのである。――之はユダヤの歴史家ヨシフアスの記す所である。

當時の人たちは、腐敗した治者階級、サドカイの王及び、其配下――等を、全部追放つて、ダビデの子が、政治を執る世が、一日も早く來て欲しいと待ち憬るゝのであつた。イスカリオテのユダの考が、茲にあつた。

イエスに對する尤も大なる誘惑は、之等の傾向に對して如何なる態度を執るかにあつた。荒野の誘惑の一つ、天下の萬國を與へやうと云ふ誘惑は、此ことを意味した。（ルカ四章五）

ヨハネと悔改の思想

此時、豫言者の最後の一人として、猛然崛起して、悔改めの福音を説いたのが、バプテスマのヨハネであつた。

民衆が、方向を失つて暗中模索してゐる時に、バプテスマのヨハネは、

一人目醒めて凡ての人々に「悔改」を促したのであつた。

革命の外に、行く途がある――それは、今迄の途を全然、抛棄して、新らしい途に進むことである。或人々は、ヨハネの言葉に由つて、若し、其準備がないならば、キリストの來ることは、不可能であると考へ、心の準備をするのであつた。

嗚呼、蝮蛇の裔よ！
誰が、汝等に來らんとする怒を避くべきことを告げしや？
然ば、悔改に符へる果を結べし。
汝等、心に、我等が先祖にアブラハムありと
思ふこと勿れ。
我、汝等に告げん。
神は、よく此石をもアブラハムの子とならしむべし。
今や、斧は樹の根に置かる。
故に、凡て善き果を結ばざる樹は、伐られて、火に投げらるゝなり。（ルカ三章七―九）

と、云ふのが、ヨハネの說く所であつた。此鋭い警告を聽いた人々は、ヨハネの下に

集つて、『然らば、我等何を爲すべきか？』と、問ふのであつた。

ロシヤが動亂し、英國が昏迷する時に、今日の我等も又、『我等、何を爲すべきか？』と問はざるを得ないのである。

ヨハネの答は、極めて簡單であつた。

ヨハネ答へて云ひけるは、『二つの衣服を有てる者は、有たぬ者に分け與へよ、食物を有てる者も、然すべし』

稅吏もバプテスマを受けんとして來り云ひけるは、『師よ、我等、何を爲すべきか』
答へて云ひけるは、『定まりの稅金の外に多く取ること勿れ』
兵卒もまた問ふて云ひけるは、『我等は、何を爲すべきか』答へて云ひけるは、『人を强暴し、或は、誣訴ふるを爲す勿れ、得る所の給料を以て、是れりとすべし』（ルカ三章十一―十四）

兵卒に對するヨハネの忠告は、此儘、そつくり今日の支那の軍人達に當る所の警告である。

實際、私は、支那を漢口から北京へ旅行してみて驚いたのであつた。支那軍隊に對する給料が、少ない上に、其支拂も澁り勝ちなので、すぐ暴動を起したり、民家を掠奪

したりするのである。そして馬賊的軍人が、意氣揚々として威張つてゐるのである。

若し、今日、洗體者ヨハネの言葉を――イエスの言葉で無くても――此儘、實行するなら、確に世界は一變するであらう。

悔改めの思想と洗體者ヨハネ

エリヤとヨハネ……マタイ十七ノ十一

悔改のバプテスマ……ルカ三ノ三

悔改の果……ルカ三ノ八

文字通りに、二枚の衣服を持つてゐる人は、一枚を他人に分け、食物を持つてゐる人は、其食物を他人に分つ――之だけのことを實行しても、今日の社會は、面目を一新するであらう。

所が、今日の基督教會は、中々さう云はない。

『二枚の着物を持つてゐる人は、二枚持つてゐてもいゝ』――と彼等は云ふ。

社會は、印紙や、レイルや、砂利や、泥を喰ふ人があつても、さして制裁を加へやうとせぬのである。外國の忠告でも受けぬと容易に軍縮をしない――だからして、悔改めを要するのは、豈、バプテスマのヨハネの時代のみならんやである、少くとも、ヨハネの心持だけでも我々に無いといけない。

日本でも成金時代には、嫁入の際に、三十六萬圓の衣裳を新調した或富豪の娘があつた。其女の人は、三百七十枚もの衣裳を作つたのだと云ふが、一體、其樣な一生に一遍も着けないやうな着物をどうするつもりであらう。

女の人は、本能的に、衣服には魅惑されるものと見える。呉服屋の前を通ると女の人の顏が變る――日本に於ける呉服屋の九割は、女の人の相手にしてゐる。之は餘り感服されないことである。

貧民窟では、一枚の衣物を二人で着てゐる。一人が着てゐる間は、他の一人は、蒲團に潜り込んでゐるのである。私に其經驗がある。そんな有樣を實見すると、二枚の衣物の一枚を持たぬ人に分けて遣りたくなる。

今日の私共は、矢張、バプテスマのヨハネの忠告を聞く要がある。

たゞ、衣裳を飾ることのみを圖るのは、藝者か人形の部類の眞似に過ぎない。

『食物を多量に持てるものは、持たざる者に分け與ふべし』――食物を多く持てる濠州は、持たざる國に分け與ふべしである。

若し、此事が、本當に實行されるなら、革命も戰爭も不要となる。

此言葉を實行するか、爲ないかで、革命か、悔改か――が起るのである。

我々は、今日、覺醒しなくてはならぬ。今日、考ふべきは、單に財産の問題のみならず、性慾の問題がある。

日本でも、五十年前には、人々に相當の訓練があつた。然し、今日の日本人には、何らの道德的訓練も無い。それで、一寸、搖れ出すと――伊藤燁子の問題を始め野村隈畔の問題等――何が飛び出すか豫測されないのである。

換言すると、今日の時代には、全く、神が無いのである。だから、根本的に、大きな悔改が行はれないと危いのである。

かゝるものが、ヨハネ出現の時代であつた。そこに、悔改の福音が說かれたのであつた。

或人々は、『悔改？　そんなことがあるか？』と本統にしないが、悔改――宗敎的更改は、或時には恐ろしい社會勢力となるのである。

米國に於けるビリー・サンデーの宗敎運動の如き、其著しい一例である。

彼が、或都市に傳道を開始しやうすると、其前に四十日位、準備祈禱會を開く。そして、町々を區分して、一軒〳〵で、小さい祈禱會を開くのである。すると、其町の犯罪が見る〳〵減少するのである。

バチソンと云ふ町へ彼が行つた時なぞ、實に驚くべき程であつた。

或人々は、祈會なんかつまらんと云つて、輕視する。然し、祈禱會は、充分、經濟的方面へまでも、大なる變動を及ぼして、遂には、貪慾な資本家が改心するやうな結

果を見るのである。悔改は、かくして、一つの大なる社會的勢力である。

悔改に由つて、日本の犯罪が減少する時代が確に來ることを私は、信じてゐる。

第二節　イエスと悔改めの福音

萬人の悔改

イエスは、かゝる社會的雰圍氣の最中に雄々しく立上つて、悔改の福音を説かれたのであつた。

イエスは、革命主義者とは、違つた立場に在つた。彼は、神の國へはいる手段として、悔改を宣傳された。

イエスの福音には、四つの眼目があつた。それは、(1)時は滿てり、(2)神の國は近づけり、(3)悔改めよ、(4)福音を信ぜよ――と云ふことであつた。イエスは、弟子達にも、同じ事を宣傳せしめた。

弟子達出でて人々に悔改むべきことを宣傳へ（マコ傳六章十二）

革命か？　悔改？

イエスと其弟子達に、改心しろ〳〵と告げ歩いた。

若し、我々が革命を望まないならば、悔改に行くより外、道は無い。

見よ！　お隣の國に火が燃え上つてゐる。世界の各地に火の柱が立つ。

それで、私は、日本の悔改めのために聖書を説くのである。

先づ悔改めよ！　たゞ、口で悔改めたのでは、何にもならぬ。ヨハネの警告、イエスの所説を、身に實行するのでなくてはならぬ。

イエスは其一生涯を通じて、悔改の福音を説かれたことが多い。

イエスと悔改の福音

悔改の宣傳……〔**イエス**　マコ一章一五　**弟子**　マコ六章十二〕

(1)　神國は近づき悔改めよ……マコ一章一五

(2)　罪許さゞ……ルカ五章六、マタイ九章六

(3) 罪あるを招きて悔改めしむる爲……ルカ五章三二、マタイ九章十三、マコ二章十七
(4) 弟子悔改を宣傳す……マコ六章十二
(5) 罪の許されし女……ルカ七章三九
(6) 弟子云ふサタン天よりおつ……ルカ十章一八
(7) 萬人の悔改……ルカ十三章三、五
(8) 無花果と園丁の忍耐（悔改を持つ人）……ルカ十三章七
(9) 一人の悔改めと天の喜び……ルカ十五章七
(10) 放蕩息子の例……ルカ十五章十一
(11) 死より甦る者あるとも悔改めざる人……ルカ十六章三〇
(12) 審判の日と悔改……ルカ十七章二六
(13) 罪を悔いし人の祈……ルカ十八章十二
(14) ザアカイの悔改……ルカ十九章二
(15) エルサレムの悔改……ルカ十三章三四
(16) イエスに膏をぬりし人……ヨハネ十二章二
(17) ペテロの悔改……ルカ二十二章六二
(18) 十字架の盜賊……ルカ二十三章三九

其うち、特段に注意すべきは、萬人の悔改についてゞある。

其頃、集りたる者の中に、ピラトが、ガラリヤ人の血を、其供物に混じしことをイエスに告ぐる者あり。イエス答へて、彼等に云ひけるは、『汝等此ガラリヤ人は、是の如く惱まされし故に、凡てのガラリヤ人よりも益りて、罪ある者と思ふや？　我、汝等に告げん、然らず、汝等、悔改めづば、皆同じくせざるべし、シロアムと塔倒れて壓殺されし十八人は、エルキレムに往める凡ての人人よりも益りて、罪ある者と思ふや？　我、汝等に告げん、汝等悔改めづば、皆同じく亡さるべし』（ルカ十三章一—五）

或人は、『俺は、さう惡人でない』と云ふ。『それは外の人のことだ。罪？　罪なんか、云ふことを止して呉れ！　幸に持合してゐないから』と。

然し、イエス・キリストは『悔改めないと皆同じく亡される』と云はれた。十八人——シロアムの塔の下敷になつて壓殺された少數の人々のみが、罪人であるのではない。萬人が罪の裡にあるのだ。それで、凡ての人が悔改を要するとイエスは云ふ、果して、萬人が罪の裡に居るか？

例へば、生蠻の社會では、日本人の首を獲ることは、罪であると考へない。彼等の間でのみ、相對的に考へるならば、立派な行爲であるとせられるのである。武士道と云ふものも單に其圏内だけで考へるならば、優秀な道德であるかも知れない――然し、もつと高い標準から、神の立場から批判すると、それは、案外、大きな罪であるのかも知れない。我々は、根本を變へないといけない――(それが悔改の意味である)――とイエスは云はれた。

今日の基督教會はどうか?、成程、一寸した罪、云はば、他人の足を踏んだ位の罪は責めるかも知れないが、それよりも、もつと恐ろしい、大きな罪を責めない。資本主義の大きな罪惡! それについては、全く沈默を守つてゐるのである。或人は、銀行の利子で、自分は少しも勞働しないで食つてゐる。誰が、其利子をつけて呉れたか? それは、全く勞働階級が殖して呉れるのである。それには、氣がつかない。そして、誰も、自分の手で創つたものゝ如く振舞つてゐる。サラリマンの人たちでも、早く資本をつくりたいと考へる。かゝる考を、根底から更改し、其ことが、惡いことであることを、はつきり見極めなくてはならぬ。

或は、國と國とが、血醒さいサアベルを下げて睨み合をする。ワシントン會議では、大分武力の縮少が計られたが、軍備徹廢迄は、まだ中々容易でない。

此等のことも、唯、相對的に批判するのであれば、左程、惡事でないかも知れない。然し、生命の本流から考へれば、大きな錯誤であることが默頭かれる。

私は、上海の貧民窟を歩いてみた――其處では纏足した婦人たちが、危なげに、足の甲で歩いてゐた、餘程可笑しな、又悲慘なものである。サアベル、勳章、爆彈の投合――も、或は、纏足に類する悲慘な滑稽ではなからうか?

遊廓の存置だつて、同じことである。墮落した人々にとつては、當り前のことであるかも知れぬ。賭博でも、打つ人々から考へれば、普通のことであるかも知れぬ。支那の廣東では、政府が、賭博稅を收納してゐる。即ち、所謂、テラ錢を其處では政府

へ収めれば、堂々と賭博が出來るわけである。

自分ぎめの物尺の外、批判の標準を持たない間凡ての人々は、墮落の渦中に在りながらも、少しも墮落してゐない積りでゐる。

神戸の市中に遊廓が設けられてゐる。誰が之に對して反對の聲を擧げるか？

それが罪であると知つてゐて、若し、反對の叫を擧げないとすれば。擧げないだけそれだけ罪を犯してゐるのである。

凡ての人が、悔改めて、總立ちになつて、此神戸市から、——或は、日本の國から、不潔なものを全然、清滅せしめるのでなくてはならぬ。

資本主義、軍國主義、凡ての惡に對して、我々は拒否するだけの勇氣がなくてはならぬ。

一人の悔改

然し、萬人の悔改は、容易ではない。それで、唯一人の魂でもが、神に向くことが、あれば、それは、大きな惠であると云はなくてはならぬ。

其一人が、ことによれば、アブラハム、イサク、イザヤ、モーセのやうな優れた人物であるかも知れない。

あなたが、悔改めることに由つて、アブラハムであり得たら、どれ程、有難いことであらう。神に立歸る或一人が、或は、新らしい王國の建設者であるかも知れないのである。

> われ汝等に告げん、此の如く、一人の罪ある、人悔改めなば悔改むるに及ばざる九十九の義人よりは、尙天に於て喜びあらん。（ルカ十五章七）

所謂、義人の九十九人よりも、悔改めた一人の罪人の魂の方が、どれ程、美しいことか。

イエスの譬喩のうち、尤も美はしいものは、ルカ傳十五章の放蕩息子の譬喩である。

トルストイは、譬喩は長けてゐたと云はれるが、イエス・キリスト程、文學上から見ても、優秀な譬喩を語る人は、世界に其例がない。人の心を抉るやうな話をすることは、中々六ケ敷いものである。

佛敎の御經の中にも、イエスの此譬喩に似た物語があるが、內容は、ズット劣つてゐる。

イエスの此物語に出て來る父は、世にも珍らしい、子供を全然信じ切ることの出來る善い型の父である。普通の父ならば、いくら息子が改悛して歸つて來たとしても、『もう少し樣子を見てゐやう』とする所を、此父は、息子が、自分の許に立歸るや否や、一言叱責の言葉もなく、既往をすつかり忘れて、善い衣物を着せ、指環をはめさせ、又、御馳走をするのである。傷める魂を抱いて父の許に立歸つた息子にとつて、それは、どれ程、嬉しい、有難いことであらう。

私は、在米中、よくビリー・サンデーの說敎會へ行つた。そこへは、二萬人、二萬五千人からの多數の人々がいつも集るのである。それで、餘り人が多いので、後の方は、顏だか何だか見分けのつかぬ程である。下には一面にソー・ダスト（鋸屑）が、音の立たぬやうに敷きつめてある。やがて、說者が終りに近づく。すると、ビリーは、改心者を寡る。其時は、彼は、『ヒッチング、ザ、ツレールー、』と云ふ。

Hitting the Trail！

カリフオルニヤ、オレゴンあたりには大きな森林がある。さう云ふ森の中にはいると、よく道を失ふて、あちらこちらとさすらふことがある。そんな場合に、折よく、誰かゝ歩いた道を發見するならば、其道に沿ふて歩いて行けば、いゝ。其如く、私たちはイエスの歩んだ道に沿ふて行けば、間違ひはない。

ビリーが、『ヒッチング・ザ・ツレイルー』と叫ぶと、八百人、九百人の人が、其場所に出て來る。そして、ビリーと握手をするのである。

ビリーの父は、南北戰爭の時死んだ。彼は、貧しい丸太小屋で生ひ立つた。彼は、

兄弟が多く貧しいので、學校へも行かず、十八九歳の時、或田舍の停車場の驛夫になつた。後、シカゴの基督敎青年會の書記などをした。其うちシカゴで、ベース・ボールなどを覺えて、酒飲の友人と交はるやうになつた。彼は、ホワイト・サックスと呼ぶチームに屬して、傑出したプレーヤーとなつた。或る、彼は、同じ仲間と共に、シカゴの貧民窟の近くにある、バシフイック・ミッションの近くへ通りかゝつた。其時、町角で、ハリー、モンローの一隊が熱心に路傍說敎をしてゐた。其間の側は、バアである。バアの入口に立つて、ビリーの一隊――チームの連中が、それを見てゐた。

九人のベース・ボールの仲間の中、サンデーは、一番宗敎的にも熱心であつた。それで懸命に路傍說敎に聞きとれてゐると、外の者が、『おい、ビリー歸らう、日曜にチームをしなくなるといけないよ。お前は、餘りに宗敎的だ！』と云つた。然し、ビリーは、一人後まで殘つて、遂に改心した。彼は、友人に云つた。『俺は、もう日曜には、ベース・ボールをしないよ。小さい時からお母さんが、俺に聖書を敎へて呉れたのだ。

俺は、もう酒を飲まぬよ！』と云つた。

そして、彼は、一年に、一萬弗から儲かる野球選手を捨てゝ、アレキサンダー、チャプマンの巡廻天幕傳道團に參加して、天幕の找打になつた。

ビリーの野球仲間の一人は、酒屋の亭主となり、九人のうち大部分は、强酒のため、血が吹いて、そこからアルコールが滲み出て、火がついて死んだとのことである。死人の足に火がつくなんて、本統のことのやうに考へられないが、實際恐ろしいことである。貧民窟で、私は、そんな恐ろしい目に遭つたことがある。

ビリーは云ふ、『俺は、早く改心して、何十萬人の魂の救靈者となつたが、友人九人のうち、八人までは失敗した。唯、俺一人だけが、無事にホームランしたのだ。神さまは、アンバイアだ、或者は、フアーストベースでアウトする。

我々の仲間のたましひは、途中でバラ〳〵と落ちてしまつた。何人、此中でホームランするか？』と。

バアに飛びこむか、或は、ビリーのやうに、神のふところに飛込むか、神は悔改めたたましひを迎へて下さるのである。

之は、ザアカイの改心を見ても、ペテの場合に於てもさうである。

イエス、エリコに入りて、過行くとき、ザアカイと云へる人あり。税吏の長にして富める者あり。イエスは、如何なる人なるかを見んと思へども、身長低ければ、大勢なるに囲りて見ることを得ず。彼を見んとて走り行き、桑の樹に登れり。イエス其道を通らんとする故なり。イエス、茲に來り、仰ぎて彼を見、云ひけるは、『ザアカイよ、急き下れ！我今日、必ず汝の家に宿らん』。彼急ぎ下り、喜びて、イエスを迎へたり。人人之を見て皆、呟きて云ひけるは、『彼は、往きて罪ある人の客と爲れり』ザアカイ起ちて、『主よ、我所有の半を貧しき者に施さん。若し我、誣訟へて人より取りたる所あらば、三倍にして之を償ふべし。』イエス、彼に云ひけるは、『今日、此家、救はるゝことを得たり。蓋、此人もアブラハムの裔なればなり。それ人の子は、喪ひし者を尋ねて救はん爲に來れり』(ルカ十九章一—十)

ザアカイの改心の模様は面白い。彼は、何げなく、評判の高いイエスを見やう思つて木の上に登つたのであらう。所が、イエスは、彼に、慣し〳〵しく、『今晩は、お前の家へ泊るよ』と云はれた。イエスは、マタイの關係からザアカイのことをよく知つて居られたかも知れない。ザサカイは、木の上から辷り落ちる間に、改心した。彼は、改心と同時に、財産の半分を貧民に施與すると云つてゐる。今日の人は、心だけは悔改めるかも知れぬが、財産は、其儘にして置く。ザアカイの改心に學ぶ所がなくてはならぬ。

ペテロは失敗の多い男である。今、信仰が熱烈であるかと思つてゐると、次の瞬間にはもう墮落してゐる。貧民窟には所謂、信仰の後すざりが多い。信仰の狀態が、いつも波狀を呈するのである。ロンドンの救世軍の成績をハロルド・ベグビーが、『再生の人』の中に描いてゐるが、それに依ると、一人の人が、大抵四度位、墮落してゐる信仰がいつも動搖してゐるのである。或人の信仰の狀態がそれである。行つたり來たり、時計のペンヂユラム(振子)のやうに動いてゐる。そんなむら氣では、救はれない。終り迄忍ぶ者は救はれるのである。

ペテロは、感情的であつたので、屢々、失敗を繰返した。

主身を回してペテロを見たまへり。「今日、鷄鳴く前に、三度我を識らずと云はんと主の云ひたまひし言葉をペテロ憶ひ出し外へ出でて痛く泣けり。(二十二章六一)

貧民窟には、此種の人間が多い。私の傳道に由つて改心した人は少なくないが、大抵は、永續せぬ。然し、たまには質のいゝ人があつて、信仰が起ると共に、向上して、遂には、貧民窟から外へ出てしまふ。なるべく上の方へ昇つて行つて呉れぬと困るのである。貧民窟なんかは、早くからつぼになる方がいゝのである。

ニューヨークにブルックリンと云ふ大きな橋がある。まるで虹のやうに長い橋である。其下は、ゴロつきの集合場であるが、其處に、ウオター・ストリート・ミッションと呼ぶ、基督教の傳道所がある。其處へは、實に獰猛な奴がやつて來る。

其實狀は、ハードレーと云ふ人の『ダウン・イン、ザ、ウオター・ストリート』に詳しく書いてある。彼ハードレーは、元十萬圓からの年收のある辯護士であつたが、墮落して、ゴロッキの仲間へはいり、遂に貧民窟へ落ちて來たのであつた。そして、

元ゴロッキであつたマコーレーと云ふ傳道者に救はれたのであつた。彼はマコーレーの改心談を書いて居る。ゴロッキの仲間は、よくハドソン川や、イースト川のドックを稼ぎ場にして、色々の物を泥棒してゐるのである。或日、マコーレーの處へ背の高い傳道師が現はれた。それは、或寒い雪の朝であつた。マコーレーは、彼を見て、

『ビスケットでも呉れんかい』と云つた。

傳道師は、彼に懇に

『いゝ加減に改心しろよ』

と勧めた。すると彼は、

『俺には、オーバコートが無いんだ』

と云ふ。傳道師は、

『遣るよ』

と云つて自分の着てゐたのを拔いで、マコーレーに着せた。マコーレーは、そのこ

とが元で改心し始めた。『俺をこんなに可愛つて呉れる。之は、矢張キリストの力だ。お前の爲に、改心してやらう』と云つた。彼は、間もなく八百屋を始めた。ワゴンの上へ品物を並べて賣るのである。一束二錢で賣るのであるが、誰も買ひに來て呉れぬ。それで、彼は、折角、改心してゐたのに、又後すざりをして、川泥棒を始めた。彼は、改心しては墮落し、改心しては墮落し、——四度も同じことを繰返したが到頭最後に改心した。そして、彼は、本統に、悔改めると共に、ブルックリン橋下のウオターミションへはいつて、其處の創始者となつた。其處では、改心した人間に、食事をさせたりもする。そして、附近の極惡な連中に傳道をするのである。マコーレーの證言は、人々の肺腑を打つた。そして、彼に因つて色々の不思議が起つたのであつた。

私は、そのことを書いた、ハアドレーの著を詳しく讀んで、思はず知らず涙を流し——泣き乍ら讀んだのであつた。

一人の魂が悔改めることが、どれだけ大きな喜びであるか。ハードレーの傳記を讀めば、世界の革命以上の大きな神の經綸がそこに行はれてゐることに氣が注く。

ルカ傳二十三章には、イエスと同時に十字架に釘けられた盜賊が悔改めたことが出てゐる。

（十字架に懸けられる罪人の一人『イエスを譏りて云ひけるは、『汝若し、キリストならば、己と我等を救へ。』他の一人答へて彼を責しめ云ひけるは、『汝も同じく審判を受け乍ら、神を畏れざるか？　我等は當然なり。爲しことの報を受くるなれど、此人は、何も善からぬ事を爲さざりしなり。』斯くてイエスに云ひけるは、『主よ、み國に來らん時、我を憶ひたまへ』、イエス答へけるは、『誠に我、汝に告げん、今日汝は我と偕にパラダイスに在るべし』（ルカ二十三章三九—四三）

此樣に、どんづまりにゐる人は、時に目醒ましく改心することがあるが、上等階級の人々は容易に改心せぬ。

悔改めの無き人々

第三節　悔改めし人々

イエスは屢々、心の全く硬化した人々——悔改めざる人々のために

長嘆をせられた。ツロ、シドンと云ふのは、地中海沿ひのフイニシアの港町であるが、イエスは自國のコラジン、ベテサイダの頑固なのを見て、若し、此等の町々で行つた異能を、外國のツロ・シドンで行つたら、必らず彼等は悔改めたであらう——と云はれた。

あゝ、禍なる哉、コラジンよ、噫禍なる哉、ベテサイダよ、汝等の中に行ひし異能を、若しツロとシドンに行ひしならば、彼等は、早く麻を着、灰を蒙り座して悔改めしなるべし。審判には、ツロとシドンの刑罰は、汝等よりも却つて易からん。既に天にまで擧げられたるカペナウムよ、又陰府に落さるべし。』(ルカ十章一三—一五)

イエスのエルサレムの頑硬に對する痛烈な嘆きの言葉は、今も我々の胸を衝く。

噫、エルサレムよ、エルサレムよ、預言者を殺し、汝に遣はされし者を石にて擊てる者よ、母鷄の雛を翼の下に集むる如く、我、汝等の子供を集めんとせしこと幾度ぞや、汝等は好まず。視よ、汝等の家は荒地となりて遺さるべし。誠に我、汝等に告げん。主の名によりて來る者は幸なりと汝云はん時至る迄は我を見ざるべし。』(ルカ傳十三章三四—三五)

頑固なる悔改めなき人々

あゝコラジンよ(悔改ざるにより)……ルカ十章十三、マタイ十一章二〇
悔改めざるエルサレム……ルカ十三章三四
神の招きを受けぬ人々……ルカ十四章十九
罪を悔ゐざる人々……マタイ廿一章三二
悔改めざる農夫……ルカ二十章九
悔改めざる人々……マコ四章十二

悔改と譬喩

九十九人の健全な人のために、キリストの福音は無用である。唯一人の病ある人にとつて、彼の宗教は現實である。キリスト者には專門がある。——即ち、イエス・キリストの專門は、『罪人科』である。之を忘れるならば、基督教は使命がない。

それでイエスは、一疋の迷へる羊のために苦勞する羊飼に自らを擬せられた。

或るパリサイの人の家で、イエスが御馳走になつてゐた。其時、一人の女——マグダラのマリアであると云ふ——が、這入つて來て、イエスの足下で哭いて、涙でイエ

スの足を潤ほし、首の毛で、それを拭つた。かつ其足に口を接け、また香膏を之に塗つた。それで、それを見てゐた此家の主人が『此人若し、豫言ならば、觸りし者は誰なるか、又如何なる女なるか知らん、此女は惡行をなせる者なり』と心の中でイエスを詰つた。イエスは彼の心を洞察して、一つの譬喩を語られた。それは次のやうな物語であつた——

イエス『或貸主に二人の負債者ありて、一人は金五百、一人は、五十を借りしに、償ひ方なかりければ、貸主との二人を免したり。然ば、二人の者其貸主を愛すること孰れか多き、我に聞かせよ』

シモン『我思ふに免さるゝ事の多き者ならん』

イエス『汝が思ふところ違はざるなり。

——(イエス、女を顧り見てシモンに向)——

此女を見るか。我汝の家に入るに、汝は、我に口を接けず、此女は我此處に入りし時より、我足に口を接けて止まず。汝は我首に膏を塗らず。此女は、我足に香膏を塗れり。之故に我、汝に云はん、此女の多くの罪に赦されたり。之に因りて其愛もまた多きなり。赦さるゝこと少なき者は、其愛もまた少なし。』(ルカ傳七章三六—四七)

其他イエスは、悔改について——三年間、肥料を施しても、チットモ無花果に實がならぬ。それで、主人が、憤つて切倒さうとした。すると、『もう一年辛抱して呉れ』と園丁が、それを止めた——悔改めを忍耐して待つ心を物語られた。

イエスは、個人的の悔改と共に、町全體、都市全體の悔改を考へられた。

エルサレムに對するイエスの痛嘆は、一つの詩である。私は、幼少の時、之を英語で諳誦したことがある。立派な一つの散文詩である。我々も、一人の悔改を祈ると共に大きな都市の——東京、大阪、神戸——或は、日本を對象として、考へなくてはならぬ。小さいことゝ共に、大きな容體を祈る的としなくてはならぬ。

神戸に戸が開かれるなれば、或は、日本の心は開かれるのでなからうか——と屢々考へる。

ヨナの警告によつて、ニネベは悔改めた。我々も、ヨナと共に、大きな都市の悔改のために盡すのでなくてはならぬ。

悔改と譬喩

九十九の羊と一匹の羊……ルカ十五章七
放蕩息子の喩……ルカ十五章十一
悔改めし兄……マタイ廿一章二九
悔改めと負債者……ルカ七章三九
無花果と園丁の忍耐……ルカ十三章七
富める人と甦の人……ルカ十六章三〇
罪を悔いざる農夫……マタイ廿一章三四
罪を悔ゆる人の祈……ルカ十八章十二

都市と悔改

(1) カペナウム、コラジン、ベテサダの悔改……ルカ十章十三
(2) エルサレムの悔改……ルカ十三章三四
(3) ニネベの悔改とヨナの兆……マタイ十二章三九、マタイ十六章四
(4) ツロ、シドン……ルカ十章十三
(5) サマリア……ヨハネ三章五

悔改めし人々

四福音書を通觀して、悔改めて罪を赦された人と云ふのは、たゞの六人しか無い。イエス・キリストの弟子の中にも、前生涯のやゝこしい者が、あつたらしい。

我々が取扱つて、尤も取扱ひにくいのは、所謂前科者である。前科があると、『私は改心してゐます』と云つても容易に他人は信じて呉れない。我々は、さう云ふ人々の改心、世間が相手にせぬ人々の改心を信じるのでないといけない。

イエスが、中風の人に對して、『子よ、汝の罪赦されたり』と云つた。すると、其處に座してゐた數人の學者が、心の中で、『此人は、何故、かく惡口を云ふか？神に非ずして、誰か罪を赦すことを得ん』と云つた。イエスは、直ぐに彼等の心中を見拔いて『汝等、何ぞ、心中にかゝる事を論ずるか？　中風の人に、汝の罪は、赦されたりと云ふと、起きて汝の床を取りて行けと云ふといづれ易きや。それ人の子、地にて罪を赦すの權威あることを汝等に知らせん』と云つて、中風の人に、『我、汝に告ぐ。起き

て床を取り汝の家に歸れ！』と云はれた。すると、其人は直ちに、起きて床を取つたと云ふ。（マコ二章一一―一二）――口先でもつて、罪を赦すのと、立ちて歩めと云ふのとどちらが六ヶ敷いか。勿論、後者である。

心の上つつらの改心だけでは、何にもならぬのである。改心の實が、其の人全生活を通して表現されるのでなくてはならない。

全身、全靈、全財産を入れて、神に奉仕するのでなくてはならぬ。さうなつたら、確かに、基督教の中に、新らしいパルズ、脈動が始まるに相違ない。

善を以て惡に勝つべし――其場合には、充分に、勝たなくてはならぬ。

ゴロッキが來た時なぞ、はつきりした態度を執ることが大切である。いけないものはいけないときつぱり拒否が出來ないといけない。いつまでも否か應か分らぬ態度を執つてゐる人は、賴みにならぬ人である。拒否の云へない人は、又、本統に應諾の云へない人である。

女の人が、戀愛問題に出會す――若し、誰に向つても『イエス』と云つてゐるのであつたら、實際の然諾はないわけである。本統のノオー拒否の無い人には、眞の愛は無い。エホバは嫉む神であると云ふ。嫉妬のない所には、愛は無い。

何でも、『よし、よし』ではいけない。はつきりと善惡の區別をつけて、赦すものは赦さなくてはならぬ。曖昧であつてはならぬ。

どん底にゐる人は、反つて、早く悔改める、それは、何にも持つてゐないからである、それで思ひ切りよく、スッパリと悔改めることが出來る。イエスは、其例を稅吏と、娼妓とに見た。

誠に汝等に告げん稅吏及び娼妓は、汝等より先に神の前に入るべし。（マタイ二十一章三一）

悔改めし人々

(1) 癲瘋の人……ルカ五章六

(2) 罪を悔いし女……ルカ七章三九

(3) ザアカイ……ルカ十九章二

(4) ペテロ……ルカ五章八、二十二章六二
(5) 税吏娼婦……ルカ五章三〇、マタイ二一章三一
(6) 十字架上の盗賊……ルカ二十三章三九

第四節　福音としての罪の赦と悔改

人の罪を赦すこと――寛容であることは、中々六ケ敷い。

或時、ペテロが、『主よ、幾度迄我兄弟に罪を犯すを赦すべきか、七度までか』と云つて聞いた。するとイエスは、『七度を七十倍せよと云はれた、それは、終り迄赦せと云ふ意味である。此は、暴力に對する無抵抗である。

暴力に對する無抵抗

（マタイ十八章二一―二二）

イエスは、悪いことを悪いとはつきり云ふと共に、罪を赦した。そして、兄弟が罪を犯した場合には、こつそり行つて諫めたらしい。若し。それでも聞かなかつたら、兩三人の證人と、立合の一二人を連れてもう一度忠告に行けばいゝ。それでも聞かなかつたら教會に告げ、若し、最後まで改心しなかつたら、其兄弟を、『異邦人かつ税吏の如き者にすべし』と云はれた、それは、隔離せよと云ふ意味である。顔を見ると癪にさはるから隔離をしたらいゝ――然し、それは、最後の手段としての罪人隔離法則である。

主の祈の中にも『我等に罪を犯す者を我等が赦す如く、我等の罪をも赦し給へ』と教へられた。

イエス・キリストは、唯一つの場合――聖靈を瀆す罪――を除く外、凡ての罪を赦された。聖靈を瀆すとは、善を惡視し、善惡をわざ〳〵顚倒することである。善を知つて、わざ〳〵惡の方に向つて行く罪は赦されないのである。

福音としての罪の赦と悔改

再び罪を犯すな……ヨハネ五章十四
悔改めの忠告……マタイ十八章十五
悔改と寛容……マタイ十八章廿二
罪を赦す主の祈……マタイ六章十二

罪の許すイエス……ルカ五章六、ヨハネ八章二
許されざる罪……ルカ十二章十、マタイ十二章三一

罪を赦すイエス

我々の中には、大なり、小なり罪が潜んでゐる。神を認め得るだけの大きな良心がないならば、其人の魂は、罪の裡にあるのである。それであるから、凡ての人が、悔改めることを要するのである。

神の——生命の本流の中に人の罪を赦し、もう一度、傷ついた良心を癒し、さすらひ行く魂を神に引返す力がある。我々は、ホームランしなくてはならぬ。

イエスは、神の中にある此力——救の力を體驗して、人の罪を赦された。

罪を許すイエス

罪を赦すイエス……ルカ五章二十、マコ二章、七九

悩み深く人心を抉ぐつて罪を敎へまたその罪を赦し給ふた。

イエスは誠に福音としての罪の赦を敎へ給ふたのだ。

イエスに由つて、其惠は我々に示現されてゐる。此が福音でなくして何であらう。

此救の力を信ずることに由つて、新らしく、力づけられなくてはならぬ。そして、暗い神のない生活から、思ひ切りよく更改して新らしい生活にはいらなくてはならぬ。世界の眞の更改は、かくて、革命に由らずして、悔改——心の更改に由つて行はれるのである。

第七章　イエスと神の國

神の國とその正しきを求めよさらはこれらのものはみな汝等に加へられるべし

——マタイ六章三十三節——

第七章　イエスと神の國

第一節　イエスの宗教の社會性

二つの焦點

イエス・キリストの宗教は、個人宗教に終始せずして、今一つ大きな社會的理想を有つてゐる。即ち基督教には、二つの焦點がある——一つは、イエスと稱する個性のうちで、尤も鋭い突切つたものと、今一つは、神の國と云ふ社會理想である。

それは、イエスの如き人になることゝ共に、イエスの如き人の澤山集團した一つの新らしい社會組織を組立てることである。他の宗教には斯の如き理想がない。

佛教は、成佛したらそれだけ――で、神の國と云ふやうな社會理想は、其處にはない。日本の神社佛閣には、或種類の社會性を帶びたものがあるが、明確な理想はない。

所が、イエスの宗教には、個人的理想と共に、『我等の父よ』と云ふ複雜の方面がある。眞の宗教は、必ず、社會性を帶びる。今日の大問題は、社會の再建設である――どう云ふ理想國を建てるかゞ今日の問題のうち最大なものである。

今日迄の社會には、傳統的である外に、理想がなかつた。それで、それが封建制であらうが、立憲制であらうが、持合せのまゝで滿足してゐた。然し、時代は變つた。今日では、國家も、或る大きな高い理想のために、引きづられて行くやうになつた。ワシントン會議を始め、近頃、開催される種々の國際會議は、必竟此事を指云するものに外ならぬ。

英國に於ける新らしい國家理想の如き其著しい例である。シドニー・ウェッブは昨年（一九二一年）『社會主義的英國々家』と云ふ憲法を起草した。英國には古來不文の憲法があるに拘らず、彼は、それに滿足せず、自分で好きな憲法をつくつたのである。そして、其理想的憲法へ、英國が移るやうに彼は努めてゐるのである。尤も理想の高い社會組織を描き得る宗教が、尤も大なる宗教である。

然らば、イエスの描いた理想社會は、どんなものか？　それを明かにする爲に、私は、先つ現代社會的理想と、イエスの社會理想とを對比して研究してみたい。

現代の社會的理想と神の國

『時は漸てり、神の國は近づけり、汝等悔改めて、福音を信ぜよ』（マコ傳一章一五）

(1) 國際的國家
(2) 無產者の國家

古代の社會的理想と神の國

(1) ロマ帝國と神の國――ユダヤ王國と神の國
(2) パリサイ宗と神の國――バプテスマのヨハネと神の國

現代の社會理想を二つの方面から考察する――量の方面から見れば、國際的理想が盛に語られ、また、實際に行はれて行く。質の方面から見るとプロレタリアの專制の世界が、理想と考へられてゐる。イエスは、然らば、どんな社會理想を抱いてゐられたか？　現代國家、社會組織、並びに社會主義に對するイエスの態度はどうであるか？

ヨハネの囚はれた、後イエスは神の國の福音を宣傳へて、『時は、滿てり神の國は近づけり』と云はれた。イエスの最初說かれたのは、神の國であつた。イエスの宗敎のごく深い處に、神の國と云ふ思想が流れてゐることを、何人も見逭すことは出來ない。『時は滿てり』、と云はれた意味は何であるか？　何故、イエス・キリストの時に始めて時が充ちたか？

世界史は、イエスの時をターニング・ポイント（轉廻點）とする。何だかイエスの時に世界史が二つに折れたやうな氣がする。兎に角にも彼の出生を以て、世界の曆が變つたのである。イエスの來た時が、丁度、歷史の流の滿潮で、それからは、退潮である――之は、どう云ふ意味であるか？

これは、イエス・キリスト迄の凡ての社會組織は、來るべき神の國の準備であつて、そして、イエスに依つて、其の完成が圖られたと云ふ意味である。イエスが、特段に、自分の時が、一ぱいに充ちたと云はれた意味を三つの方面から考へてみよう。

第一は、其當時の精神生活を調べなくてはならなぬ。そして、それは正しくキリストの出現に依つて充たされたのである。ユダヤ人の精神生活も、ギリシマ人の精神生活も、ロマ人の精神生活も――バビロン、アッシリアの精神生活も、正にキリストに依つて成就されたものであつた。第二に當時の社會生活は、――主として其道德的方面は、どうしても、キリストの出現を待たずに居られない程切迫したものであつた。第三には、イエスの時代に於ける政治的方面及び、各方面の制度から考へるに、其當時の世界は大きな羅馬帝國に依つて統一されると共に、異常な權力の集注を見たのであつた。私は、以下、更に進んで、當時の精神生活、道德的狀態、政治的狀勢を概說

するであらう。

メシアへのあこがれ

イエスの出生の時、東方からマガイ（博士）達が、星に導かれて尋ねて來たと云ふが、その當時のバビロンの宗球的雰圍氣と云ふものは、どうしても西に光を求めずには居られない狀態にあつた。人々は堪え切れぬ、精神的空虛を味つてゐたのであつた。

バビロンの初期の宗敎に、恐い呪の神――モロドクイ、シタル等を拜んでゐたものであるが、天文學が進むにつれて、バビロンの宗敎は、天文宗敎になつた。（それは、今日の天文學の先驅となつたものである。）バビロン人は、天が幾層にも七つにも重つてゐるやうに考へた。そして、彼等は、何か此天を裂いて降る或者にあこがれてゐた。そして、星の廻り工合や、天の模樣を間斷なく觀望するのであつた。このアストロジー（星占學者）の連中にとつては、星と云ふものゝみで、宗敎を編んでゐた人々にとつては、突如として一つの新星が、出現したことは、大きなインスピレーションであらざるを得なかつた。

アッシリアに於ても、星の學門の發達のために其時代の人々の精神生活が、どれ程善くなつたか知れない。殊に、オシリス宗敎がギリシャから移入されてからは、人々は、天國と云ふやうな事を考へるやうになつた。天の事を考へると他の事が飽き足らない。それでアッシリヤ、バビロン宗敎は、其自身の中に基督敎の考へるやうな考が、自づからに考へられてゐたのであつた。

ロマの宗敎はどうであつたか？　ロマへは、エヂプトから恐ろしいイシスの宗敎が移入され、小アジヤからは、シベル宗敎がはいり、軍人の間では、ペルシャから持歸つたミラス宗敎が流行して、此は一種の神秘宗敎であつた。ミラスの神體と云ふのは牛頭に、冠を被つた少年が乘つて、其牛を刄で打殺してゐる像である。之は、若者のミスラが丁度倒されてもう一度甦ることを象徵したもので、其甦る者が、即ち救主であるとした。イエスの甦りと云ふものも、要するにミラス宗敎の一變形に過ぎぬ

と云ふ人もある程である。

新約聖書――殊に、パウロの手紙に、奥義と云ふ言葉が屢々使用されてゐるが、之は、ミラス宗教の用語である。

イシスの宗教も、さうであつて、――之は、エジプトのオリス宗教と類似したものであるが、オシリス宗教は、ナイル川を表象したものであつて、洪水が溢れてまた退いて行く、然し春先になると又溢れる。それを人間が死んで甦ると云ふやうな風に考へた。――甦りの宗教、救主期待の宗教であつた、イシス宗教は、ギリシャ、ロマに廣く普又して、流行を極めたものである。

シベル宗教も、矢張、甦り宗教であつた。其當時、ギリシャに、オルフキズムと呼ぶ宗教があつた。それにも、何かどうしても救主が要ると云ふ要求が示されてゐる。

（拙著「人間として見たる使徒パウロ」六四ページ第四章第四節ミステリーの研究参照）

ギリシャ宗教は、ほゞ三期を劃して推移してゐる。ギルバート・マレーの、『ギリシャ宗教の四段階』を讀むと推移がよく分る。

第一期は、オリンピアの神々の禮拜である。オリンピアの神々と云ふのは、男女六神づゝを含むゾエウス、ジユイを各々其最高神とする十二神である。然し、この神々は、ホーマーなどの創作したものである。――丁度日本人が、八幡様や、お稲荷さんと飽いたやうに、ギリシャ人も、此等の人間にも劣る神々にぢきに飽いてしまつた。ヴルカン、ヴイーナスが、オリンピアを逃げ出した。所が、途中で二人共金の綱に掛かつたなど云ふやうな極めて、幼稚な宗教である。それで當時の詩人や、道徳的に目醒めた若い人達は、之等の宗教に反對した。そこへ來たのがペルシアからテーベを經て來た。オルフイアスの宗教であつた。之は一種の心理宗教であつて、或種の工夫を加へることに依つて、一種恍惚たる狀態に導かれるのである。オルフイズムは、かくて、ギリシャ人の間に一大勢力となつたのであつた。プラトーは、オルフイズムを研究するために各地を漫遊した程である。そして、アリストートルが出て、ギリシャ文

化は其最高調に達したが、そこで、ギリシャ文化の行詰りが來た。第三期の發端は、デイオニソスの出生を以て始つた。之は、新生、再生を象徴する所の宗教である。ニイチエは、デイオニソスの出生を喧しく云つてゐる。ギリシャでは、デイオニソスの出現と共に國民の更改が始つた。そして、ヅエウス宗教で腐敗してゐた國民の心が今一度、再生を經驗したのであつた。

紀元前二世紀の時代は、ギリシャ宗教其自身に於ても、何か救濟者の出現を待つてゐたのであつた。

或人は、今日の文明は、ギリシャ文明に、ヘブライ主義が敗けたものであると云ふが、然し、其當時のギリシャ本國は、肉慾文明に疲れて、甦りの救主への憧憬を持つてゐたのであつた。

如斯、バビロン、ロマ、ギリシャの精神生活から云つても、凡てが、疲弊して、新らしい時代の曙を焦燥の心を以て待望んでゐたのである。

精神生活の廻轉期

當時のユダヤは、どうであつたか？　紀元前七世紀頃、イザヤ、エレミヤ、ホゼア、エゼチル、アモス等の優秀な豫言者が輩出して、人間並の王では、眞の理想社會の到來は覺束ないことを力説した。アサ王もヨシア王も、――例へ、善い王であつたとしても、決して理想の王ではない。豫言者は、其理想の王を、ダビデの子に見、或は、イザヤ書五十三章に描かれてゐる如き、受難の義人に見出したのであつた。ユダヤに於けるメシア期待は、漸次に高調して、ヨシフアスの『ユダヤ人古代史』に記す所に依れば、バゴアスと云ふ男は、ヘロデ大王の姉サロメの所へ行つて、『私の腹から、メシアが生れる。私を信ぜよ』と云つたと云ふことである。それ程、人々が、メシアの出現を待ち焦れてゐたのである。つまり、古代文明は、其當時、或一轉廻を要したのである――グルリと一轉廻しなければ、どうしてもいけないと云ふのが、其趨勢であつたのである。

今日の時代が、矢張りそれである。一九一四――一八年の世界戰爭の結果は、世界

に恐ろしい疲弊を齎した。それで何か或る大きな廻轉が行はれないと、文明は唯、破壞に了る――と云ふのが、現代の有樣ではないか、恰度、そのやうな考が、キリストの時代に人々の胸に湧いたのであつた。

イエスの『時は充てり』と云はれた言葉の意味は、古代の精神生活史を研究してみると、始めて如實にうなづかれるのである。若し、其當時、キリストが來なければ、キリストを製造したかも分らなかつたのである。

道德的生活の頽廢

又、之を其道德的方面、社會生活の方面から考察しても――其當時の道德と云ふものは、ギリシャ、ロマの道德であつて、それは、レッキーが、其名著『歐洲道德史』中に詳述してゐるやうに、頽廢の極みに達してゐたのである。

ロマ帝國は、實に、想像もつかぬ墮落のどん詰りにあつたのである。世界大戰前、フランスにデカタン氣分が滿溢して、マラルメ、ボオドレエルの連中が、盛に、デカタン藝術を發表し、肉慾を讃美したが、ロマの當時が、矢張それであつた。

皇帝ネロは、自分の作つた戲曲を本物にしたいと云ふので、ロマ市に火を放けて燒いた。之は、其當時のロマ人にとつては、少しも珍らしいことではなかつたのである。それ程までに、ロマは頽廢の裡にあつたのである。

ユダヤの道德的生活はどうであつたか？　ヘロデ大王は、エヂプトのクレオパトラと殆んど親類關係にあつた人で、クレオパトラとヘロデ家との間には、頻繁な交通が行はれてゐたものである。殊に、ヘロデ大王の如きは、自分の家の血統が善いと云ふので。それを守るために、エヂプトあたりの風習を眞似て、兄弟結婚を行つた。

バプテスマのヨハネは、ヘロデ、アンテパスを責めて、『お前は、兄の妻を奪つた。怪しからぬ』と云つて罵つたが、當時の貴族階級の廢頽した人達から見れば、そんなことは、『何云つてゐるのだい』位のことであつたのである。アジアの方面も、エヂプトの方面も――凡ての社會生活が、恐ろしい廢敗に染んでゐた。それで、何かの力が

來なくてはならぬと云ふのが、其當時の狀態であつたので

戰爭か？　宗教的更改か？鐵瓶の蓋を跳ね飛ばす蒸氣の力のやうな――或大きな力の臨むことを人心はせつば詰つた心持ちで望むのであつた。

歐洲史をみても、一つの國が、四、五百年も大きな勢力を以て世界を統治したのは、此時に、たゞ一遍のみである。それは、世界始つて以來の著しい出來事であつた。シーザー以來、ロマは四百十年の――アラリックが、之を引繰返したまで平和を樂しんだのであつた。其後、歐洲は、幾つもの小國に分裂したのであつた。

だから、キリストが來たのは、史上に唯一遍しかない。一番いゝ時に、來たのであつて、正に時は充分に充ちてゐたのである。

內側からの强きメシアに對する憧憬と、外側からの熱烈な要求とが、燃え上つた時、其時に、イエス・キリストは來られたのである。今日が、此點に於て、イエスの時代と酷似してゐる。歐洲とアジアの列國が、今日程、社會的變動を見なくてはすまぬ時代は嘗つて史上になかつた。

シーザー一人の腕でやる時代は過ぎた。それでまだ〳〵極めて不完全ではあるが、國際聯盟が、世界を管理しやうとし始めてゐる。

道德の方面から見ても、歐洲の戰後、何か新らしい力が來なくては、やり切れぬと云ふやうな氣運が暗默の裡に動いてゐるのである。

一時、世界の目を瞠はらせたレニンの共產主義もどうも甘く行かぬ。それで、宗教を破壞しやうとするロシアの反面には、チホン大僧正に對する大きな情熱が湧き上つてゐる。どうかして『神の力』に賴らなくつては、ロシアは維持されないと云ふ宗教的復興が、今ロシアの裡に大きな力を以て行はれてゐるとのことである。英國も、ドイツも、何か知らぬが、一つの變動が――若し、外側から來ないとすれば、――內側から來ないと到底、遺り切れぬと云ふのが、今日の時代の心持である。

キリスト・イエスが來たのは、かゝる精神生活史上の廻轉期――世界史に於けるたゞ

一遍の重要な危様に於てゞあつた。それで、イエスは、もう一度、時代が、ぐるりと廻轉して、神の國へ向かなくてはならぬと叫ばれたのであつた。

第二節　神の國の本質

社會性より見たる神の國

イエスは、其社會的理想として神の國を指示した。然らば、神の國の本質は何であるか？　それは、血緣を基準とする生理的國家ではない。然も、神の國は、一種の御家騷動、――精神的革命――に因つて家の中が、一度引繰返されて後、始めて來るとされた。

『それ我が來るは、人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、嫁を其姑に背かせんが爲なり。』（マタイ十章三五）

イエス、彼等に云ひけるは『誠に汝等に告げん。凡そ、神の國の爲に、或は父母、或兄弟、或は妻、或は兒女を捨つる者は、此世にて幾倍を受け、來世には、永生を受けざることなし』（ルカ傳十八章二八――三〇）

それで、故加藤弘之博士の如きは、基督敎に全然、反對を表せられたのであつた。國柱會の人々は、だからして、基督敎は、非愛國的であるとして、攻擊するのである。多くの人々は、それで、聖書の此處の部分だけは、飛ばして讀まうとするのである。然し、基督敎には、確かに、一つの恐ろしい性質がある。其理由は、神の國と云ふものが、民族、種族、血統、父母の關係、親族の間柄に緣由する肉體國家でなくて、純然たる心理的國家であるからである。イエスは、云はれた。人間は、生理的關係にへばりついてゐる間は、到底、本統の社會が生れるものでは無い。眞の社會は、一つの新らしい、全く生理的關係を超越した所のものである。

例へば、茲に一つの基督敎會を創るとする。それは、全く民族に關係なく創られる。其中へは、西洋人も何の障りもなく這入つて來る、たゞ神を考へることに因つてのみ其處では、人々が結合される。又音樂には、國境が無いと云ふ。ベートーベン、ワグナーは、人種の差なく人の魂に訴へる。其他、彫刻、建築等、凡ての藝術は――心と

云ふものを中心として立つ一切のものは、凡て、生理的關係を越えて、東西の別あく人心に響く。

我々が、善、或は眞實について考へる場合が、矢張それである。其處には、種族を考慮する必要は全く無い。我々は、種族――生理的關聯を跳退けて雄々しへ立上り、新らしい方面に進むのでなくてはならぬ。眞理の把持のために、或は、父と子と母と娘とが、離れ離れになるかも知れない。此意味で、多くの人は、基督敎にはいらうとして、躓くのである。或人は、『父の許可を得てから』と云ひ、『父の葬儀をすませてから』と云ふ。然し、イエスは、『死にたる者に死にたる者を葬らしたらいゝ』と云はれた。之は、血族國家で、止まつてゐる間到底眞の社會は出來ない。それで、『死んだ者に、死んだ者は葬らせて、お前は、全く新らしい者となれ――』と云はれた譯である。之が出來ぬと、眞の社會は、生れないのである。從來のまゝの、血族關係のみでは、決して、神の國は發生しない。『父母、兄弟のみに安きを問ふとも何の益あらんや。』愛も、血族關係より、もう一歩進んだものでなくてはならぬ。

『人、若し、新たに生れずば、神の國を見ること能はじ』(ヨハネ傳三章三) 心の世界に生れるのでなければ、神の國は、見ることが出來ぬのである。然し、多くの人は、此事に氣が付かぬのである。

その兄弟と母と來りて、戸外に立ち、人を遣はして、イエスを呼ばしむ。多くの人人、イエスを環りて座したりしが、彼に云ひけるは、『視よ、汝の母と兄弟、戸外に在りて、汝を尋ぬ。』イエヌ答へて云ひけるは、『我母、我兄弟は誰ぞや。』かくてまはりに座する人人を環視して云ひけるは、『我母、我兄弟を見よ。それ神の旨に從ふ者は、之れ我兄弟、我姉妹、我母なり』(マコ傳三章三一―三五)

イエスは、神の國を、人生の第一原理として呈示された。

『汝等、先づ神の國と其義とを求めよ、然らば、此等のものは皆、汝等に加へらるべし』(マタイ傳六章三三)

ヘンリー・ドラモンドは、此言葉を註解して、『基督敎は、Additional Religion 加算的宗敎である』と云つた。卽ち、若し、神の國を求めるならば、外のもの、凡てのもの

は惠も富も、皆、附加へらると云ふのである。

或宗敎は、引算的であつて、――例へは、ブラマ敎の或ものゝ如き――凡てをネチネチ、ネチ、無、無、無として、消し去るのである。欲求も理想も、凡てを消去らうとする。人間が失敗と絶望とに落入ると、此引算的宗敎に共鳴するものである。所がイエスの宗敎は、加算的である。それは、心の生活を基礎にして、凡ては、それに加算されると云ふものである。我々は、『先づ』求むべきものを知らなくてはならぬ。外のものを求むるにしても、チャンと位取が立つてゐくなては、何にもならぬ。

イエスは、神の國の性質を、一つの譬喩で以て示された――或人が大きな宴會を設けて、多勢の賓客を招いた。所が、招かれた者は、皆、色々の口實を以て、辭退した。其始めの者は、『田地を買つたから行つて見なければならない。それで失敬する』と云ふのであつた。第二の人は『私は、五耦の牛を買つたから、之を試驗してみなくてはならぬ。だから折角ですが、參上出來ませぬ』と云ふのである。第三の人は、『私は結

婚したから、御免蒙ります』と云つて斷るのであつた。遣はされた僕は歸つて、この旨を主人を報告した。主人は此を聞いて非常を怒つて、其僕に云ふには、『それでは、早速、邑の巷に出て行つて、貧乏人、不具者、跛者、盲など、あぶれ者を招いて來い』と命じた。イエスは、神の國をかく一つの賜宴、御馳走に譬へられた。そは一つの嬉しい〳〵生活である。我々は此神の國を先づ第一に求めるのでなくてならぬ。

多くの人々は、此ことを全く忘れて、たゞ忙しい〳〵で毎日を無意味に送るのである。自分では算盤で計算をしてゐる積りであるけれど、其算盤には、位取が無いものだから、忙がしく指先を動かせてゐるのみで、薩張り何が何やら分らぬのである。

或人は、宗敎は、文化生活に是非共、無くてはならぬ。だから、先づ物質的に徹底して、ウント儲けたら一つ宗敎をやつてやらうと云ふのである。先づ畑の取引をすませてから、御馳走に饗れてやらうと云ふのである。然し、若し「心の世界」神の國を第一義としないならば、そして、神の國を自らの生活に於て實現するために努力を加

へないならば、駄目である。先づ心の準備が出來上らなくつては、自由主義も、民主主義も、どうして確立されることが出來やう。

(1) 社會性より見たる神の國

生理的國家にあらず……マタイ十章三五、ルカ十八章二十九
心理的國家である……マカ三章三五
第一原理として神の國……マタイ六章三三

パシライア・ツウ・セウウ(神の國)の本質は、一體何であるか？

ロシアの貴族バクウニンは、『我々は、自由を要求する。神が居ると自由にならぬ。だから俺は、革命の前に、ダイナマイトを先づ神に投げつけやう』と云つた。彼は神を尤も邪魔者に考へた、神を一つの專制君主と考へる。さう云ふ考が、近代の凡ての社會運動家の間にはいつて行つたのである。

イエスは、どんな風に神の國を考へられたか？　イエスは決して、專制者、ヂクテーター、オツプレッサーとして神を見なかつた。若しも、神をそんな風に、何か恐ろ

しい、專制的な者に考へるならば非常な間違ひである。神は、秩序も維持するが、然し極めて自由な方であるとイエスは、せられた。

神の國の主權の問題

其點に於て、神の國と、地上王國とは、全然、其質を異にする。私の住んでゐる町の青年團は、嘗て會員數が二十四人で、其うち十八人迄は幹部であつた。殘りの六人は十四歲以下の少年である。即ち、全部が幹部である譯である。イエスは、神の國に於ては、最偉大なる者は、小使であるとせられた。

彼等(イエスの弟子達)の中にて長たる者は誰なるかと互の爭ありき。
イエス彼等に云ひけるは、『異邦人の王は、其民を友配す。父その上に權を執る者は、惠を施す者と稱へらる。然ども、汝等は、かくすべからず、汝等のうち、大なる者は善きが如く、首たる者は、仕ふる者の如くなるべし』(ルカ傳二十二章二四―二六)

眞の神の國は、如斯く、奉仕者の王國である。所が、多くの人々は、何か大臣にでもなることを偉いことのやうにも考へる。大臣は、要するに我々の事務員に過ぎぬ者

では無いか。最も大なる者は、小使である。神戸の町で一番、偉い人は肥汲、掃除人夫である。一番つまらぬ人は、額に汗を流さぬ遊食の徒である。

イエスは、幼兒の偉大を讃えられた。額に皺が寄ると、人間は、心迄皺が寄るものである。それで、心に少しの皺の寄らぬ、どんな人でも受け容れる、赤坊の心をイエスは偉大であるとせられたのである。

誠に汝等に告げん、凡そ幼兒の如くに神の國を承けざる者は、之に入ることを得ざるなり。（ルカ十八章十七）

貧民窟は、まるで破れた玩具の寄合のやうで、人間の屑ばかりが集群してゐる。然し、子供は、さうでない。元氣で、絶えず躍動して、新らしい精神に溢れてゐる。老人は、ヂット座り込んで、過去ばかり話してゐるが、子供は、どうかして延び上らうとして、いつでも未來の話のみをしてゐる。

赤ん坊のやうな心になれたら實に有難いことである。若し幼兒の如くに、柔和に、

凡ての人を受け容れることが出來れば、其人は最も偉大なる人である。所が、日本人の多くは、子供の眞似が嫌ひである。馬鹿らしく子供の眞似は出來ないと云ふのである。それで、日本人には、舞踏がない。子供は、筋肉を百八十から二百五十通りも動かして、いつでも躍つてゐる。それに、大人は、ぢきに悲觀する。イエスは、此の明るい赤ん坊の心を取回さなくては神の國は、分らないと云はれた。ウォルヅオスは、『赤ん坊は、父の父だ』と云つた。赤ん坊の方が、大人よりも、先にある。我々は永遠の赤ん坊でありたい。さうでないと、神の國は分らないし、我々の成長は止るわけである。

イエスは、肉體の王を何とも思はなかつた。イエスは、ヘロデ・アンテパンスの支配下のガリラヤで育つたが、或時、パリサイの人々が來てイエスに『ヘロデ王が、あなたを殺さうとしてゐるから、此處を立ち退きなさつた方がいゝ』と云つて忠告した。

當日、或るパリサイの人人來りて、イエスに云ひけるは、「ヘロデ汝を殺さんとする故に、此處を去り

住け』答へて云ひけるは、『汝等行きて、其狐に告げよ。われ今日、明日、惡魔を逐ひ出し、病を醫し、第三日に此事了らん。然ども、今日、明日、また次の日は、我必ず行くべし。そは、預言者はエルサレムの外に殺さるゝこと有るまじきなり』(ルカ傳十三章三一—三三)

處がそれに對して、イエスは、ヘロデが檢束しやうと云ふなら、仕事を濟ましてから、四日目にこちらから行つてやらう』と云つた調子でかる。之は、云はゞ、不敬罪である。從つて、彼は、王に對して少しも恐るゝ所がなかつた。

イエスは、『貢をカイザルに納むるは善きや、惡しきや、汝如何に思ふか、我等に告げよ』との問に對し、

『貢の金錢を我に見せよ』彼等デナリ一つをイエスに持來りしに、之に云ひけるは、『此像と、號は誰か』答へて『カイザルなり』と云ふ。玆に於て、イエス彼等に云ひげるは、『然ばカイザルのものはカイザルに歸し、神のものは、神に歸すべし』彼等、之を聞き奇としてイエスを去り行けり。(マタイ傳二十二章一七—二二)

或は、また『何を見んとて野に出しや、風に動さるゝ葦なるか。さらば汝等何を見んとて出しや。柔らかき衣を着る人なるか。美はしきものを着て、奢れる者は、王の宮に在り』(ルカ傳七章二四—二五)と云つて、王宮の豪奢を諷刺せられ、『心してパリサイの人のパン種を慎しめよ』(マコ傳八章一五)と云つて、王の僞善の方面を戒しめられたのであつた。

神の國に於ての主權は、地上王國の如き、壓制者の手にあるのでなく、柔和と愛とに充つる幼兒の心の所有者に握らるゝものであるとせられた。若し、あなたが、大臣、或は王であるならば、人に奉仕をすると云ふ覺悟を要するのである。大臣とは要するに、俺の仕事をさせてやつてゐる——人民の小使に過ぎないではないか?眞の價値は神にのみある。その神の國の眞の王は、誰であるか?

ピラト、イエスに云ひけるは、『然ば汝は王なるか』イエス答けるは、『汝の云ふ如く我は王なり、我、之が爲に生れ、之が爲に世に來れり、蓋、眞理について證をなさんためなり。すべて眞理につく者は我聲を聽く』(ヨハネ傳十八章三七)

イエスは、ピラトの問に答へて『我は王なり』と云はれた。どうして、かゝる勢力

がイエスの裏に發生したか？　彼は、凡ての權威の持主として自ら示現してゐる。

イエス進みて、彼等に語り云ひけるは、「天のうち地の上の凡ての權を我に賜はれり」（マタイ二十八章十八）

(2) 主權の問題

——物質超越—マタイ廿章二九

一、專制か否か？—地上王國との相違

狐よ……ルカ十三ノ三二

王のものは王に……マタ十七ノ二五

柔き衣を着たるもの……ルカ七ノ二五

ヘロデのパンを慎め……マコ八ノ十五

二、偉大なるものは使はれるもの……ルカ廿二ノ二四

三、幼兒の偉大……ルカ十八ノ一七

四、メシヤ及王としての耶蘇……ヨハネ十八ノ三七

五、凡ての權威の持主イエス……マタイ二八ノ十八

イエスは、自らが其王である「國」を指して、『我國は此世の國ならざる也』と云はれた。それは永遠に現はれて來ないもので、社會性の裡に發見さるべきものであるとせられた。

神の國の地域と住民

神の國は人の心の裏にある。それで、コロンブスがアメリカ大陸をスコットが北極を、ナンセンが南極を發見せる如く、發見さるべきものである。

また天國は畑に藏れたる寶の如し、人見出さば、之を秘し、喜び歸り、其所有を賣り盡して、その畑を買ふなり。（マタイ十三章四四）

若し、我々が、努力して發見しないならば、神の國は來ない。然し、發見の志さへあるならば、其處に神の國は出現するのである。

(3) 地域の問題

顯れ來るものにあらず……ルガ十八ノ二〇

此世にあらず……ヨハネ十八ノ三五

人その裏にあり……ルカ十七ノ二一

發見された神の國……マタイ十三ノ四四

神の國は、幸に地圖に載つてゐない――凡ての人の領有に托せられてゐる。

神の國の住民として、イエスは、

(4) 住民の問題

新生の人々……ヨハネ三ノ三
忠義な人々……マタイ十八ノ廿三
ヨハネより偉大なる神國民の微小者……マタイ十一ノ十一

或人は、デモクラシイの時代には、忠義なんか要ら無いと考へる。それは、大きな間違ひである。一つの團體が在る以上、それに對する奉仕を爲し得ない人は、眞の神の國の住民ではない。ロイスは、それで、『忠義の哲學』を書いた。一人に仕へるか、萬人に、心理的社會組織に仕へるかの差はあるにしても、是非、其處に缺いてならぬものは、忠義心である。

神の國を支配する法則

神の國を支配する法則として、五つ――成長則、競爭則、淘汰則、補償則、互助則を擧げることが出來る。

沃地に播かれたるものは、人、言葉を聽きて、之を受け、或は三十倍、或は六十倍、或は、百倍の實を結ぶ者なり。(マコ傳四章二十)

神の國は、人、種を地に播くが如し、日夜、起き臥しする間に、種はえ出でゝ、育てども、其然る故を知らず、それ地は自から實を結ぶものにして、初めには苗、次に穗出で、穗の中に熟したる穀を結ぶ既に實れば、穫る時、至るに因りて、直ちに鎌を入れさするなり。

また云ひけるは、神の國は何に比らべ、何の譬をもて、之を喩へん。一粒の芥種のごとし。之を地に播くときは、よろづの種よりも微さけれど、既に播きて、萠出れば、萬の野菜よりは大きく、かつ巨なる枝を出して、空の鳥、その蔭に棲む程になるなり。(マコ四章二六―三二)

神の國は、永遠の成長を其特性とする。其處には、また競爭が行はれる、淘汰が行はれる。

此の如く、後の者は先に、先の者は後になるべし。夫れ、呼ばるゝ者は、多しと云へども、選ばるゝ者は少なし。(マタイ二十章十六)

人の子、己れの榮光をもて、諸の聖使を率ゐ來る時は、その榮光の位に座し、萬國の民を、その前に集め、羊を牧ふ者の綿羊と山羊とを別つが如く、彼等を別ち綿羊をその右に山羊をその左に置くべし。(マタイ二十五章三一―三三)

神の國には、自然淘汰ではないが、神の淘汰が行はれる。あなたは、此神の選びに洩れてはならぬ。然し、叙上の三則に、成長にも、競爭にも、淘汰にも、洩れた者は全く絶望であるか？所が、神の國には、今一つの――補償則、或は、解放の法則が行はれる。

(5) **神の國を支配する法則**

一、成長則……マカ四ノ二〇、廿一
二、競爭則……マタイ廿五ノ廿九、廿ノ十六
三、淘汰則……マタイ廿二ノ十四
四、補償則（解放則）
　　微者の解放……マタイ十八ノ一四、マタイ廿五ノ四五
　　罪人の救濟……マタイ廿一ノ三一
　　無產者の解放……ルカ四ノ十八、マタイ廿ノ一以下
　　失はれたる者の救濟……ルカ
　　子供、貧民、裸者、犯罪人の解放……
五、互助則（金則）……ルカ六ノ三一―三八

それは、最も弱き者の解放であり、罪ある人に對する救濟である。そして歴へつけられたる者、貧しき者への自由の回復であり、凡ての奴隷の徹廢である。ジュビリー（喜びの年）の宣言である。そして、凡ての人が、もう一度、神の惠にはいつて來るのである。それで、眞の神の國は、淘汰に洩れた人をも、もう一度救ふ所にあるのである。

成長しない人間には歴史がない。人間が、歴史を有つたのは、漸く過去四千年間である。日本の國では、それは、千六百年以來である。それも其多くの部分は、古事記、傳說の類であつて、純粹に歴史らしい歴史の始つたのは極めて最近で、僅か千年位前からである。ヘンリー・オスボーンの說では、原始人類が地球上に發生してから五十萬年ホモサピエンが現はれてから二十五萬年と云ふことであるが、其時代の人間は、全く無歴史である。子供の日記がそれで、殆ん毎日、同一記事の繰返しである。成長があつてこそ始めて、人間に眞の歴史が生れるのである。成長も進化もない者には歴史は無く、其生活は、唯、輪廻である。救濟とは、神に目醒めることに依つて、此輪廻生活を破つて、もう一度成長のある世界に引上げられることを意味する。

放蕩者には、歴史が無い――假令あつても、汚ない歴史で、書かれたら困る、間違つた生活から急角度で神の方へ上る時に、始めて歴史が發達するのである。

米國に於ても、奴隷解放が行はれて後に、眞の歴史が生れたのである。宇宙に一つの法則がある。それは、廢滅に瀕した者をもう一度、神の方へ引上げやうとする補償の力である。罪惡を贖ふと云ふ、犠牲と愛の法則が其處に見出される。私は、歴史を此角度から覗いて、要するに世界の歴史は『贖の歴史』であるとする者である。

或人は、基督教の愛はセンチメンタルであると云ふ。然し、同じことをクロポトキンが云へば信ずるのである。

イエスは、神の國を支配する互助の法則について云はれた。

己れ人にせられんとする事は、亦、人にも其如くせよ。己れを愛する者を愛するなり。己れに善きを爲すは、何の酬あらんや。惡人も亦、是の如く爲すなり。汝等、返さるゝ事を得んと思ふ人に貸すは何の酬あらんや。惡人も其如く返しを得んとて、亦、惡人に借すなり。汝等仇を愛し又、善を爲し、何をも望まずして、貸し與へよ。然らば、其酬は大なり。且、至上者の子とならん。それ、高き者は、恩を忘るゝ者、及び、不善者にまで、慈愛を施せばなり。之故に、汝等の父の憐憫の如く、亦、憐憫を爲すべし。

人を議する勿れ、然らば、汝等も議せられず。人を罪すること勿れ。然らば、汝等も罪せられず。人を恕せ、然らば、汝等も恕さるべし。人に與へよ。然らば、汝等も與へらるべし。彼等、量をよくして押し入れ、ゆすり入れ、溢るゝ迄にして、汝等の懐に入れん。汝等量る所の其量にて、亦、人に量らるべし。(ルカ六章三一―三八)

イエスは、人間の心の本質に於て、『己れ人にせられんとする事は、亦、人にも其如くせよ』と云ふ互助の法則を發見せられた。此を、特に金則と呼ぶ。之は神の國を支配する諸法則のうち、最根本的なものゝ一つである。

神の國と法律

トルストイは神の力に由つて人間が完成さるゝ時には、政府の厄介にならくても天使のやうになれると考へた。それは、一種の無政府主義――道德的アナーキーズムである。神の國に於ける法律の問題はどうか?

一、超法律……反律法的……マタイ九ノ十三、マタイ十一ノ十三、マタイ十二ノ一—八、マタイ五ノ十八—二〇、マタイ五ノ一七
二、超警察……マタイ五ノ二三
三、超監獄……マタイ五ノ廿五
四、超犯罪……マタイ十八ノ廿一
五、超裁判……マタイ七ノ一

イエスは、神の國は、超法律であるとせられた。イエス・キリストは、法律を破壞しない、反つてそれを成就するのが自分の使命だとせられた。そして、法は、進化するものであると考へられた。

われ、律法と預言者を癈る爲に來れりと思ふ勿れ、われ來りて、之を癈るに非ず。成就せんが爲なり、われ誠に汝等に告げん、天地の盡きざる中に律法の一點一畫も遂びつくさずして癈ることなし。(マタイ傳六章一七—一八)

イエスが、玆に、律法と云はれたのは、モーセの十誡を指す。

モーセの十誡は如何にも原始的である。然し考へれば考へるほど、社會立法としてはそれは根本的なものであつて、原始社會に於ては、それより以上の法律を持つ必要が無いように感ぜられる。それより以上に持つものは多くは不純な習慣法である。驚く可きことはモーセの十誡が立派に總轄的に與えられてゐることである。私は文明國民としても十誡以上を持つ必要を認め無いとも考へる。たゞ不幸にしてこの『生』の根本原則が今日我等二十世紀の文明人が實行出來ないことは、昔のモーセ時代の人間も少しも變りは無い。イエスは此意味に於て律法の破壞者では無く完成者であることを、自ら指摘したのである。そしてこの律法の完成が新宗教にのみよつて可能であると考へる。それは能力の問題であつた。外部的の關係でこの律法は完成されないと云ふのが、十誡である。此種類の誡は、どれも除いてはならない。

イエスは、人間が、內側から、神の力に充たされる時に、自然的に、此等の法律が、全部、充たされることを考へられた。

神の國は、超警察である。スコットランドでは、救世軍の士官一人が、二百人の巡

査に相當してゐると云ふ。

更に、神の國に於ては、監獄が不用である。今日の、日本の如き、監獄では、收監者が決して改善されぬ。始めて監獄へ入れられる者の約七割は、再犯者として、再び監獄へ戻つて來るのである。神戸の監獄でも、前科二犯以上が、尤も多い。そして彼等は、獄内で酷い勞役に服して居る。鎖と手錠では、人間は善くならぬ。

ニューヨーク洲のトーマス・オスボルンの改良したシンシン監獄では、看守の大半を全部止めてしまつて、僅か數人の看守で、九千人からの囚人を監視してゐる。そして囚人に自治させてゐる。どんな風にやるのかと云ふに、囚人の中には、元辯護士の人もあり、又新聞記者をやつてゐた人間もある。さう云ふ人間に看守をさせるのである。看守のみならず小使も囚人が勤める。如斯く改良されてから、其監獄では、逃走する人間が無くなつたとのことである。

日本の監獄では、囚人に許される運動は、一日僅か十分間であるが、シンシン監獄では囚人はベースボールをすることまで許すのである。

ニューヨークの或人たちは、オスボルンの此やり口を疑つてゐた。『あんなに監獄内を自由にしたら監獄へ行きたくて仕方がなくなならう』と云つた。然し、事實は、今迄初犯者の七割以上が再犯者として舞戻つたのに、其後、囚人を教育してからは、それが、約二割に減退したとのことである。今や此オスボルンの監獄改良運動が到る處に普及して、ワシントン附近の海軍監獄でも、彼の方法を採用してゐるのである。監獄改良は、ベルジウムに於て、ドイツに於て重視せられてゐる。眞の人間の魂の改造は、日本のやうな狀態では到底、不可能である。イエスは、法律が役にたゝぬまで、人間が、内側から改まつて來ることを企圖されたのである。即ち、イエスは、神の國を考へた時に、いつも、神の國と公義とを一つに考へられたのであつた。

第三節　神の國への推移

神の國と心的推移

イエスは、萬人の更改を考へた。即ち、革命なくして、凡ての人々が改心することを欲したのである。私は、屢々日本の勞働者が、革命歌を唱つてゐるのを聞く。革命は、今日の場合、止むを得ないと云ふ人がある。

然し、私は、イエスの立場と方式とを信ずる。矢張、革命でなくつて、萬人の更改でなくてはならぬ。凡ての人が更改して、神の國へ立ち歸るのでなくてはならぬと考へる。資本家も、中間階級も勞働者も、凡てが更改して、新らしい神の國と、社會的理想に目醒めなくてはならないと思ふ。

イエスは、神の國は、心の中に、勵みたる者、柔和なる者に、與へられると云はれた。そして、それは、また、特にイエスに委ねられたものであるとせられた。

神の國と心的推移

勵みたる者神の國を取る……マタイ十一章十二

柔和なる者に與へらるゝ國……マタイ五章三

イエスに委ねられる國……ルカ二十二章二九

神の國と直接行動

神の國は、地上王國ではない。それで直接行動に依つて來るものではない。イエスは、ピラトに、『汝は王なるか？』と訊かれた。そして彼は、『汝の云ふところの如く我は王なり』と答へられた。茲に、イエスの殺されざるを得なかつた理由がある。パウロは、『我實に汝等が王たらんことを願ふ』と云つたが、イエスの所期さるゝ所もまた茲にあつた。凡ての凡てが皆、王樣にならなくてはならぬ。世界の十何億の人々が、一人殘らず王樣になる、一人殘らず皆が皆、富豪にならなくてはならぬ。凡ての婦人が、女王になるのでなくてはならぬ。茲に、イエスの宗教がある。

そして、我々は、王の如く、女王の如く人々の間を歩むのでなくてはならぬ。いやしくも一家の王様である。神の國の後繼ではないか？　何とも云へぬ安心が、そこに湧くのである、ケチな考は出さうとしても出なくなる。例へ、狹い部屋――六疊敷に住んでも、二疊敷に住んでも王様は王様である。エキセルシャー！　高擧の人と云ふ考を持つならば、自然と生活も高擧されざるを得ないのである。王様が、ウロ〳〵して、女郎屋へ行かう筈もないのである。そして、皆の人が、高い水準にハイ・レヴェルに昇る。一人の王でなく、萬人が王様の位に昇る。其處に、『神の國』の出現がある。

レニンは、皆を土下座させた。然し、我々は、凡ての人を尊重する。凡ての人を偉くしやうと圖るのである。そして自分も矢張り王様であることを喜ぶのである。茲にのみ實際の文化がある。即ち、それは王的平民主義である。眞のデモクラシーの實現である。そして、斯る國は、決して、暴力に依つて來ないのである。

神の國と直接行動

暴力否定

イエス答へけるは、『我國は、この世の國に非ず、著し、わが國、この世の國ならば、我僕われをユダヤ人に付さざる爲に戰ふべし、然ど、我國は、此世の國ならざるなり。（ヨハネ十八章三六）

無抵抗の抵抗

日にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言へることあるは、汝等が聞きし所なり。然ど、我れ汝等に告げん惡に敵する勿れ。人汝の右の頰を打たば、亦外の頰をも轉して之に向けよ。（マタイ五章三八―三九）

斯かる神の國は、暴力に依つて來ないものである。『善を以て惡に勝つ』所に來る。善を以てする惡への抵抗！　ストライキ、サボタージもいゝ。然し、それに依つて、人の罪が除かるゝものではない。『惡に勝たるゝ勿れ！』イエスは絶對に、暴力を否定された。然らば、神の國の來るのは漸進的か？。突變的か？

突變的か漸進的か

例へば歴史の進行を見る。漸次的に開展するだけで、波動がないと面白くない。時にガタ〳〵と行く方が痛快であるとする。時に、大きな波動が史上に起る――それを革命と呼ぶ。マコ傳十三章や、マタイ

傳二十四章に記さるゝ所は、神の國の出現の突變性である。再臨派の人々は、歴史の見方を突變的に見やうとする。戰爭があり、破壞があり、そして、『此等の日の患難の後、たゞちに、日は晦く、月は光を失ひ、星は空より落ち、天の勢、震ふべし、其時、人の子の兆、天に現はる。また地上にある諸族は、哭き悲しみ、且、人の子の權威と大なる光榮をもて天の雲に乘り來るを見ん。(マタイ二十四章二九—三十)と考へる。

然し、イエス・キリスト自身の神の國の思想は、どうであつたか? 神の國は、イエス自身の暴力に依つてゞなく、神それ自身の暴力に依つて來る。今の天地が崩壞されて、そこに新らしい神の國が客觀的に來る。人間の歴史が行き詰つて、絶望的に落入る。どうしても、上からの力が加はらなくてはならない——と云ふ時、超自然的な干渉が人間の歴史に加はつて、もう一度、新らしい開展が始められる。マタイ傳十三章十三節には、『此邑にて人汝等を責めなば、他の邑に逃れよ、我、まことに汝等に告げん。汝等、イスラエルの諸邑を廻りつくさゞる間に人の子は來るべし』と云ふイエスの言葉がある。之は有名なる句であつて、シユワイツエルは、此點を中心として、彼のイエス研究を書いてゐる。そして、イエスの神の國の思想には、全く成長進化がないと結論してゐる。神の國は、たゞ革命的に來るのみである。

然し、叙上と正反對に、イエスは、神の國が、內側から成長するものとしても說いて居られる。マコ傳の四章の譬喩の示す所は、即ち、それである。

> 神の國は、人、種を地に播くが如し、日夜起臥する間に、種生えいでゝ、育てども、其然る故を知らず、それ地は自づから實を結ぶものにして、初には苗、つきに穗出で 穗の中に熟したる穀を結ぶ。既に實れば、穫る時至るに因りて、直ちに鎌を入れさするなり。(マカ四章二六—二九)

或は、天國は芥種の如しと云ひ、パン種の如しと云ふ。いづれも、神の國の內的成長性を有つものであるを示す言葉である。

神の國の出現に關する二說

突變說

マコ十三章、マタイ二十四章

マタイ十章二三、ヨハネ二十一章二二

成長說

『神の國成るまで』……ルカ二十二章十六、マコ四章マタイ三章

我々は、叙上の見解のいづれを採るべきであらうか？　或は又、此二つの見解を如何に調和すべきであらうか？

イエスは、『神の國は何時來るか？』と訊かれた時、『俺は知らない――唯、父と聖靈のみが、それを知つてゐる』と答へられた。そして、『其時、若し、キリスト茲にあり、彼處にあり、と汝等に云ふ者あるとも信ずる勿れ』（マタイ二十四章二三）と云はれた。

或人は、世の終末の日の到來の時日を默示錄に因つて計算する。イエスは、『私も天の使も其時を知らぬ』と云はれてゐるのに、或人達は、キリストの再來が、いつの幾日であるとして、富士山の麓で待つのである。キリストの再臨とは、神の勢力の一つの干渉を意味する。神の勢力が內側から働いて來る――それは、我々の、成長を意味する人間の方面から見れば、內在的生命の向上とも考へることが出來るのである。それを、神の方面から見れば、神の勢力の人間への干渉と見ることが出來る。兎に角、神の干渉に或る時代のあることを信じて少しも差支へないのである。卽ち、それは神の革命だと考へていゝ。卽ち、神の國の出現は、人間としては、認識的、突變的である。そして、眞の解放運動は、神の聖靈の力に依らなくてはならない。

神の國と道德の完成

是故に天に在す汝等の父の完全が如く、汝等も完全すべし。（マタイ五章四八）

內側から來る所の心的革命なくして、どんな改造運動も結局徒勞である。こちらから人間の方から伸び上ると共に、向ふから――神の方から、內的の聖靈の力が働きかける。かくて、個性の更改と共に、萬人の內的更改があつて、始めて其處に神の國が現はれるのである。

■不許複製■

■イエスと人類愛の内容■

大正十二年五月十八日印刷
大正十二年五月[illegible]日發行

定價二圓

著作者　賀川豐彦
發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助
印刷者　東京市芝區南佐久間町一丁目三番地　和田操
印刷所　東京市芝區南佐久間町一丁目三番地　和田弘榮堂

發兌　東京京橋尾張町
振替東京五五三　警醒社書店

賀川豐彦著

貧民心理の研究

本書は賀川氏が貧民窟生活に於ける最初の業績であり、一部社會思想家に多大のショックを與へた著作であつた。此れ近代社會の特產物たる貧困及貧民の科學的研究として、歐米學者間に於てさへ試みられざりし心理的研究を、僅か廿四歳の青年學徒が第一指を觸れた故であり、而も單なる觀察と統計の羅列に非ずして、躬親しく貧民窟に投じ病菌と饑餓の逼る三疊の室でペンを執つたからであり、否！　貧困階級に對する熱烈な愛に裏づけられた著作であつたからである。

氏の論敵堺利彦氏等が、尙隱約の間に氏に好意を持ち得るのも、恐らく本書中に燃ゆる人類愛、貧困階級に對する同情と共鳴の結果であらう、著者が今日社會運動家としての素質は、此等の研究中に養はれたものであり、その基礎哲學學は本書が生んだのであつた。

今日社會改造、貧民救濟に思ひを寄せる青年が賀川氏の著作として最初に手を觸れる物が本書であるのも、又如上の意味からである。

□菊版六百入十餘頁　總洋布特製函入

□定價三圓五十錢　送料十八錢

賀川豐彦著

人間としてみたる

使徒パウロ

猛烈な基督教の迫害者から、突變的に基督の弟子となり、聽て眞理の把持の爲に、身を刑場に捨てたパウロ！

その血の滲んだ回心（コンバーション）こそは、後世幾多の殉教者を生み、靈の王國を築いたのである。

彼の神に對する火の如き熱情！　刑場に臨んで尙奴隷オネシモの魂を憂へる深刻な愛！　誰か彼の人格に泣かざる者、奮起せざる者があるか？

宗教改革者ルーテルも、彼によつて宗教の奧義を見、賀川氏も又彼によつて立ち得たのだ。

生命の宗教！　基督教の本義に觸れやうとする人は、先づ更生の人パウロに迄往かねばならぬ。

□四六版總布裝　天金函入美本

□定價一圓九十錢　送料十五錢

賀川豐彦著

イエスと自然の默示

四六版 總布製天金函入
定價 二圓三十錢
送料 書留十五錢

淋しい胸に光よ、射せ！　疲れた私に默示よ照らせ！　夢に幻に私は、神を見なくとも、自然と人間愛に神が見たい。

私が疲れ果てゝ、戰場に打倒れる時に、私の眼に映るものは、自然の默示ではないか！　そしてイエスが最も愛すべく、親しむべきことを私に教へてくれたものは　自然ではないか！

私の傷ついた魂よ、美までが憎惡と嫉妬の姿に映る私の眼よ！　もう一度イエスに抱きついて行つて、自然の默示を回復して貰へ。

自然よ抱いてくれ！　人と民衆が私を捨てることがあるとも、おまへだけは私を捨てないでくれ！　私はおまへに行く外に逃げ場所がない。

おゝ、自然は神の衣だ！　自然は私の衣にも適するであらう。

著者

賀川豐彦著

イエスの宗教と其眞理

四六版總布裝
天金函入美本
定價二圓二十錢
送料十五錢

體驗の生命宗教に還れ！　凡ては奇蹟である、驚異である、そして眞實である。イエスの宗教が人間更改の原動力である事實を、先づ賀川氏半生の經驗に聽け！

私は十五の幼い時から三十四の今日迄、變らざるイエスの愛に守られて、その惠みを日一日深く味ふてゐる。兇漢に擲られる時でも、醉漢に侮辱される時でも、辻の淫賣婦に接する時でも、イエスは常に私を強く、そうして、いつも聖く居らせてくれる。

私は殆どイエスの爲に何もした覺えが無い。然しイエスは私に凡てを與へてくれた。そうしてイエスを味ふてゐるその味い方を、偶々各方面の人が聞かせてくれと云はれるので、喜んで私は「イエスの宗教と其眞理」を世に送り出すのである。

神戸貧民窟にて……豐彦

賀川豐彦著

生命宗教と生命藝術

四六版三百十餘頁
總洋布天金裝函入
定價二圓三十錢
送料十五錢

これは練瓦造の教會を賑はす宗教ではない。大理石に裸體の女像を刻む藝術でもない。驅れる己の胸に刃を擬し、王者も誇の殿堂を降つて、新生の爲には十字架の血を覺悟せねばならぬ宗教である。貧民窟の膿める赤ん坊を抱いて神の藝術に醉ひ惡蛇の腹を撫で擦つて、愛の小鳩を孵化する人間建築の藝術である。この一書こそは既刊『イエスの宗教と其眞理』に對する著者の宗教哲學の確立であり、軈てはピラトの前に裁かるべき十字街頭の宣言書である。

人間苦と人間建築

菊版四百五十頁
總洋布特製函入
定價三圓五十錢
送料十八錢

私は苦痛の中に感謝すべき數々を發見しやう。人間苦は又人間建築である。苦惱の無い者に創造はない。私は苦痛そのものまでも默示として感謝しやう。こんなに考へて私は凡ての苦惱の中に靜座する。貧乏も、病苦も、凌辱も、飢餓も、監獄さへも私に與へられたる大きな默示である。私はその凡てに向つて感謝する。然も事實である。社會惡の凡ては事實である。それに就て我等は無頓着では居れない。然し苦痛を廢除する爲に更に新しい苦痛の十字架を覺悟せねばならぬ。私達はそれに耐え忍ばなくてはならぬ。……著者

504
191

終